序

抑も薩摩琵琶歌は、遠く仁明天皇承和五年、從五位上掃部頭藤原貞敏、唐より斯曲を携り歸り、之れを雲上に奉り。降つて建久七年、島津忠久薩州へ下向の時、携へ來り家傳す。其後相摸入道日新齋、當時士風の衰頽したるを見て自ら斯歌を作り、且謠ひ且彈じて一門の子弟を奬勵す、爲めに薩摩大隅日向の三國靡然として活潑の風俗に移れりといふ。爾來幾春秋を經て、明治聖代の今日に至り、隆盛殆んど絶頂に達せんとす。畢竟其歌の雄渾にして、其曲悲壯を極め、

明治家傳 内交

徐々撥を按じて一曲を彈ずれば、勇壯快活以て志氣を鼓舞し、精神を奮起せしむるに足る、眞に之れ武士的國民の思想に適ひたるものと云ふべし。斯道の名門那須祐直氏、茲に其曲節を明にし、以て本書を公にし、一誦能く初學者をして斯門に入るの便を與へしむ。春は花、秋は月下に愛吟を弄すべく、蓋し忽ちにして鬱勃の抑氣を散逸せしむるの力あらん歟。

明治三十九年端午の日

小林鶯里しるす

凡例

凡そ薩摩琵琶をはじめ、其他各種の歌を謠ふに何れも其歌の定節を知らざるべからず。頃者百般のこと、多くは便法を案出し、琵琶歌の如きも印刷物とし、其文章に符號を設け、容易に定節を知得せしむるに至る、之れ斯歌の妙趣を普及せしむるに甚だ力あるものなるも而も其れに由つて完全なる定節を知るは固より至難の業にて、若し斯歌の妙奥を探らんとならば、必ず師の薫陶の下に熟達せざるべからず。抑も琵琶歌は他の歌曲と異なり、大體の定節即ち「切

り」「大かん」「中かん」「吟替り」「崩れ」等は動かすべからずと雖も、間其中間に至つては或は各自曲節を異にする個所なきにあらず。古來の傳說に、中間は地中及びかん音（山形）に謠ふべしと云ふも、歌は抑揚のみのものなれば、其歌の種類に依りて曲節を付すべく、假令ば端物は定節を知り山形に謠へば好しとするも、段物即ち歷史的のものに至つては、必ず文章に依りて節を付すべく、畢竟其歌の目的は何れに在るかと云はゞ、聽者をして感動せしむるにあり、故に勇壯なる個所を大かんに、悲哀なる個所を地に謠はざれ

ば、如何に文章妙を得たりとも到底眞情を穿ち得さるべく、開は謠者其人の巧拙に由るものにして、斯道名人たりとも聽者に感動を與へざるに於ては何の甲斐かあらん。固より琵琶歌は琵琶に倣ふて謠ふものにあらずして、歌に由つて琵琶を彈ずるものなれば、其曲節に變化なくんば、如何なる妙手も充分彈ずるを得す。即ち初心の人にあつては、琵琶と歌とを比較し、前者は入難くして後者は入易し、然れども、入易き歌も其蘊奥を極むる迄には、能く熟練の功を積まざるべからず。予、斯道に遊ぶこと久し、而も未だ眞情

を謠ふこと能はず、幸に古來傳說を便つて研究するところあり、現時各所に招聘さるゝこと甚だ頻繁にして寸暇なしと雖も、尙榮堂主人の切なる需に應じ、聊か拙技を彈じ、各其文章へ左の畧符を施し出版發行するを諾す。若し夫れ本書に依つて同好諸士の參考ともならば、予の幸甚とするところなり

那須祐直述

符號

符號	號
「」	段落
○	中かん
◎	くずれ
、	大かん
●	吟替り

新案 薩摩びは歌目次

目次

金剛石……一
國船……五
送別……六
櫻狩……八
若木の花……十一
國の御柱……十四
梅ヶ枝……十八

王照君……二十
廣瀨中佐……二十三
月花……二十六
小督……二十九
迷語もどき……三十三
墨繪……三十五
蓬萊山……三十九
城山……四十
常陸丸……四十三

橘大隊長……四十七
威海衛……五十四
奇緣……五十九
澤陽江……六十五
川中島……七十一
俊寛……七十五
同(二段)……七十九
吉野落……八十二
同(二段)……八十六

小敦盛……九十二
同（二段）……九十九
形見櫻……百十一
同（二段）……百十七
同（三段）……百二十四
日本海大海戰紀念……百三十一
同（其の二段）……百三十七
同（其の三段）……百四十一
同（其の四段）……百四十六

新案

薩摩びは歌

那須祐直音譜

金剛石

○金剛石

金剛石も磨かずば。玉の光はりはざらぬ。人も學びて後にこそ。

「誠の德は顯はれぬ。」「時計の、針の、絶間なく。廻るが如き時の間も日影惜みて勵みなば如何なる業かならざらん。水は器に從ひて其の樣々になりぬなり。人も交る友により。善にあしきに移るなり。おのれに優るよき友を。」擇び求めて諸共に。

心の駒に鞭うちて。學の。道に進めがし。

註解　凡歌の定節は序に述べたる如く切り大かん中かん吟替崩等にして短歌には中かん吟替崩等はふし切りも極く短き歌には前の切りと後の切にて中間にはふし尤も中間の切は多く一ヶ所ふれど歌に依りては二ヶ所あるも則ち當金剛石の如き中間の切はふし初めの謠出しより最初の切迄は地中音にして大かんとは最高ある聲を云ふいづれの歌にても初の切りの跡は必ず大かんなり中かんは多く中の切より跡にあり且つ跡の切りより終りの節はいづれの歌も必ず聲の裏にて謠ふべし

發音の高抵はたとへば數にして十とせば其七八にて謠ふべし音聲は各自の天性なれば固より動かすべからず抵音の人は抵き方にて高音の人は高き聲にて好し只聲を拵へて謠ふは琵琶歌に非らず天性の聲にて謠ふべし併し聲を使ふは自由に使はざるべからず之れ抑揚にして使ふと拵へと誤らざる樣心得ざるべからず左に音聲の高抵を示せば

高音の人　十　九　八　七　六　五　四　三　二　一

抵音の人　十九八七六五四三二一

たとへば六の處を謠出しとせば五は地音にして七は大かんなり又八の處を謠出しとせば七に地音にして九は大かんなり若八の謠出しにて地音が四に落るか或は大かんが八に昇れば則ち調子外にして歌にならず茲に金剛石を符に記せば

十
九
八
七
六
五
四
三
二
一

金剛石と磨かずば玉の光りは出でじとなり人も學ばざれば道理を知らじ

六より七七より八迄の間に無論高拔の力然れども之れに就て問かざれば徒らに節を以て示すも到底其意を盡す能はず依て大略を示し置くものなり

○國船

雲に聳ゆる高山も。登らばなどか越ざらぬ。空を浸せる海原も。渡らば　一段終に渡るべし」。我蜻蛉洲は茜さす　一　東の海の離れしま。例ば海の只中に浮べる船にさも以たり。二萬方里の船の中四千餘萬の乘組あり。船の主の指揮を受け。文明海に進めゆく。水主楫取多かるに我等も楫取の一人なり。船のゆく手は和田の原。八重の汐路の遠ければ。颶さかまく折もあり。一段高

浪荒るゝ時もあり。船手の業に習はずば。追手高浪凌ぎ得て思ふ。「港」港にいかで着くべき。

註解　當國船も定節は金剛石に同じ

○送別

あかねさす、わが日本の人といふ、人のうちより撰まれて海原とほく浦々の、浪の花咲く異國に、渡り行なる君が名と、ほまれは世々に殘るらむ「大」茲に、船出を祝はむと、心をこめて足引の、山にも狩り得海に釣、川にすなどり野に求、猶あきたらで鳳を裂、麟を屠りて盃を、勸むるうちにかたへより吟ずる聲のたからかに

渭城長雨濕輕塵、客舍青々柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無故人、

と古きしらべの唐うたに、思ひをよせて別れをば、をしむ心のなつかしく、皆とり〴〵に又酒を「又」勸めて興をぞ添にける」、暫くありて一同に、さかづきさゝげ起立して、君萬歳と唱へけり「萬」萬歳と唱へけり」

註解　當送別も金剛石に同樣なるた貝に茲に畧す

○櫻狩

霞棚引やま〳〵の、さかりの花を詠むと、いなゝく駒に鞍おかせ、東雲近く麻茅生の「芝の庵を只ひとり」、「ねぐら放れしうぐひすの、聲を聞つゝ春の野に、もゆる草葉の露わけて、すゝむる駒のたてがみに、みだれかゝれる青柳の、糸を傳ふて朝風に、吹ともなしにゆかし香を、おくりてわれをさそふかと、思ふばかりに遠近の、梢は雪か白雲か、景色妙なる其さまに、うき世の善惡も打忘れ、しばし木陰に立よりて、矢たての筆をとりあへず、

薄命能伸旬日壽、納言姓字冐斯花、零丁借宿平忠度、吟詠恨風源義家、志賀浦荒飜暖雪、奈良都古簇香霞、南朝天子今何在、欲望芳山路更賒、

とかきつゞけたる水莖を、跡に殘して花の香を、風のまに〳〵とめくれば、こゝは盛をはやすぎて、ちりしく花は野に畑に、飛かふ蝶の如くなり、（嗚呼世の中はうば玉の）、（夢かうつゝかきのふまで、榮にしものゝくけふは早、見る影もなく成り果て、うき世の中とかこちつゝ、今更それとゆふぐれの、鐘の音さ

へ身にしみて、昔をしのぶ人もあらむ」　左は去ながら花の木も、又こむ春にめぐりあひ、まづしき人もいつまでか、時めく時のなからめや、榮枯盛衰は世の習ひ、只玉鋒の道理を「一段たたどらむ外はなかりけり」　いざ歸らむと乗る駒の手綱かひくる其袖に、花のふゞきはかゝりけり、花の「一段ふゞきはかゝりけり」

註解　當櫻狩は吟替より吟替にはいづれも吟替を節へて三區に分ち初めの一區は由音にてうち中の一區は中音よりかん音夫れより中音にて中の區は落にて一區は前をうけて中音より[illegible]音夫れより地音に落して止め置く其節は節揚に[illegible]節に熟みて[illegible]たし

○若木花

大和心の花と咲く。其櫻井の驛より御身を此處へ返すとて。教へ給ひし父上の。「一段言葉は既に忘れしか。「大かん獅子は生れて程もなく。」千尋の谷より刎返せんだんの木は二葉より高き薫を放つなり。御身稚くありとても父が子なれば能く思へ。腹切迚は返されじ跡を吊とも宣ず。我打死なしたり共。「中かん天子御在ます限りには。一族郎徒勞りて」戰を起し朝敵を攻亡して。叡慮を安め奉つれと。遺言を妾にこそは傳へしが。傳へし御

身早や忘れ自害せんとは愚かなり血迷ひたるか正行と。母の言葉に鞭たれ。心の駒を立直し童遊ひの軍にも朝敵を打ち。尊氏を斬らんと思ふ外はなき「心の中こそ勇々しけれ

斯くて月日に滞なく。盛りの齢になりぬれば。家の子數多相集め。吉野の宮を守護し奉り處々の戰に功名手柄を顯はして末頼母敷若者と帝も思ひ給しに。逆賊高師直等「大か雲霞の如く群りて。吉野の宮を攻んとす。」正行帝に奏す樣。君の御爲め父の爲め。命を棄てゝ忠孝の名を止むべき時來れり。敵の首を取り來るか臣が首を取らるゝか二つ一つの戰せん。是れ今生

の御見得と。なみだを袖に掛ければ。（南殿の簾を卷かしめて。（略）正行を御前近く召させられ二度の戰に打勝ちし功を深くめで給ひ股肱と頼む汝なり。必ず。其身を輕く思ふなと最とも賢き勅定に答へ申さん言葉なく。）　塔の尾指して罷り立ち如意輪堂に敷島の大和言の葉彫り付けて。「中か四條畷に打ち出でゝ。目に餘たる大軍を。」「大か右往左往に打敗り」　飽迄敵を惱して飯盛山の山麓に。草結骨大君の。爲めに死たる大丈夫は。實に獅子よりも勇しく「段せんだんよりも芳敷」　名を後世に殘しけり名を「段後の世に殘しける」。

註解　當若木の花は中間に切りあり吟詩の時に用ひ

○國の御柱　正成の一代略記

湊川流の水のいと清き、名も橘の花の香は八千代はおろか萬代の「末の末までかほるらむ」「赤阪山の秋の暮」其眞心のくれなゐは紅葉の色に輝きて、みたびよせくる人なみを、太刀風強く打拂ひ、かなたの空は雲晴て、月すみよしや天王寺、鐘のひゞきはそれとなく、諸行無常と告渡る、川は寄手の三途川、おのれとおぼれ沈み行、干劔破の城にさきがけて、「中略」が。

つ。色みせよ山櫻」

嵐や花のかたぎなるらむと、ふたりのしれもの詠みたるは、わが身の上としらま弓、引かれて藁の人がたに、たぶらかされて二つなき命を落すやがらこそ「哀と雲の上までいふもおろかなれ、「大か」、金剛山の、巍峨と、て、」

聳ねしは、動かぬ君が心にて、寄手を押へ其罪を、糺の前ゆ押出し、出雲路掛て火を放ち、（僧都をかたらひ泣しめて、）（あらぬ屍を尋ねさせ、四條河原に、よる波のより〳〵人を欺くも、心は清き櫻井の、驛に於ていとほしき、つぼみの花に別れしも、皆これ大君の爲ぞかし、

筑紫の山のほとゝぎす、友よびあ

つめ丸重の雲井の空を心ざし、飛むとするを射とめむと、

「大か弓に矢番ひ見渡せば」　須磨の上野と鹿松の、岡にどよめき

さけびあふ、聲はましらか小男鹿か、のがさじものと遠近に、む

らがりつどふけものらを、ほぐしにあらぬ鎗先に、さしてゆく

へをつく〳〵と、思ひまはせば此のちは、山ほとゝぎす山をい

で、たれ憚からず啼渡る、世とやならむと末かけて、さとるたけ

雄は今こゝに、死て七たび生れ來て、鳥やけものをかりつくし、

大御心をやすめむと、うがらつどへて湊川、あはれはかなきう

たかたの、水の泡とぞ消にける、

豹死留皮豈偶然、湊川遺蹟水連天、人生有限名無盡、楠

子誠忠萬古傳、

嗚呼是橘の花の香の世々に絶せぬしるしにて、なき後の跡迄

ももろ人の、「袖にかほりは殘りけり」　嗚呼これ橘の花

の香の世々に絶せぬ玄るしにて、なき後の跡までも諸人の、

「袖にかほりは殘りけり」

註解　當國の御柱（若本花と同様ふ中に人ふ中ふ二ふ所ふ）

○梅ケ枝

春はまづ咲梅ケ枝に。谷の戸出る鶯の。聲も聞て高瀬棹す。佐保の川原に繰かけて最と。「段」珍敷岩躑躅「平」いはん思の色にしも。

松には花を春日野の緑生へある若草に荒たる駒も懐きては。御法の門に兼て後生を願はざる人の心が卯の花や。橘匂ふ五月雨に敷忍びたる淋敷を。何の種ぬとか秋萩を植る て口惜しき庭の萩薄も。月も穂に出て亂れ亂れるあだし野の。草葉に於ける露の身も「段」消へん便を松虫の一聲さへ今

は霜枯れて。雪白妙へに故郷を哀れと云へる人はなし。恨みしの浮世かな嗚呼恨みしの此代かな。諸行無常の春の花は。

『邪生滅法の風に誘れ』

生滅滅威の秋の月は若滅威樂の雲に隠れ。何時か此代に止まらん然し浮身を捨て果んとは思へども。流石又輪廻の浪の起つ間にも。其面影が身に添ふて切るに切られぬ煩脳の。長き生命に結ぼうる身こそ悲しけれ。彌陀頼む心は雨夜の月なれや。雲井拂はねど西へ行く極樂を十萬億土と云ふなれど。又こしなんと聞く時は。「段」此處を去るこそ遠からず」

只有明の月の御船は妙法の風に。「段」任す

る身こそ安けれ」

註解　當梅ヶ枝は若木花と同じ然れども吟醫ふし

○王照君

問はず語り。誰れ聞けとてか打詫る。身のうさを知れ山時鳥軒の草忍ぶとすれど秋更けて齢ひ。「果たる蟲と我かな」

露の命も惜しからん風に任する

「夫れ一生の別れには」

窓の燈火悲み骨髄に通り來て。形は憔悴と衰へて。只何事も妹背の契り淺衣の。薄き緣にしと成り果てゝ哀れ果敢なき我身

かな。一度君に別れては遂に相逢ふ事もなし。隔て盡せし千山萬水の雲終夜。心に掛けて思へども君に逢ふ夜の夢だにも見ぬ。今世の中に物思ふ身は我等計と思へども（中巻）又昔を傳へ聞く時は。』

王照君の其の古へは漢の帝の美人にて御寵愛は類ひなし。殿上にても並びなく。誠に雲の上人にて流石優優敷御座せしが。如何なる人の讒言にや胡國と云る遠國の夷の在所に「（前巻）流され給ふぞ哀なり」。去ば王照君は今は早や棲み慣し花の都を（略）涙と共に立出づる）。（略）或る時は船に召され又或時は殊にけわしき山を越へ）。（略）余り我身の悲さ

に。駒の上にて琵琶をも彈し古郷戀しき歌の曲樣々朗詠〳〵給へば）　風情水音皆悉く腸を斷とかや。帝も今は聞召御愁歎の御事にて忝くも龍顏に御涙浮ばせ給ぞ難有や。去ど又綸言汗の如くにて再び召し返さるゝ沙汰もなし。彼は唐土之は我朝。又は胡國夷の朝に春は藁屋の夜の雨。乾坤萬里と隔たれど物思ふ身は異ならず。流れも同じ水なれど。「一説」淵瀨と變るが如くなり」。　只何事も吐鶻血に泣て。何ぞ腸を斷とかや。然し口を結で三秋を。「一説」過むにはよしなかりけり。

註解　當王照君は若木花と同樣ふるを以て暑さ

○廣瀨中佐

七度も生きかへりつゝ夷をぞ拂はん心我れ忘れめや最後の歌を小塚原空敷忠義の鬼となりし松蔭神靈の今茲に「一説」又もあれます軍神」「いさめぬ時はきざらぎの」　空さりげなく春の雪降る宣戰の大詔征露の事起りしより武士のとり傳へたる梓弓射るか彌生の花と散り霞と消へし大丈夫の多きが中に朝日子の廣瀨中佐の打死は傳へ聞くだに涙なり比は三月廿七日　「港口閉鎖の任務を帶び」　福井丸に打乘

りて向ふはいづこ旅順口百の雷失叫の玉のあられと降る中
をおめずおくせず決死隊

玉の緒の絶ゆるもやまじ敷島の
大和おの子のつとめつくまで

と詠みたる歌はまのあたり捨る此身の屍をかざる錦と覺悟して志したる港口に「我と我が船打沈め」　任務は終へぬいざ去らばボート却ろせの命令に兵士ひとしく乘うつる中佐も乘んとしたりしが見れば一人不足なり兵士一人の玉の緒も國の寶とかねてより部下をいたわる仁愛の情の聲を

ふりしぼり　（杉野兵曹長はあらざるか）（呼べど答はなかりけり杉野兵曹長はあらざるか再び呼べど答なし）（杉野兵曹長はあらざるか呼ぶ事三度に及べども答ふるものは荒浪の早もデッキをかくすまで）　船は次第に沈み行く是迄なりと飛うつる刹那に敵彈飛來り「中佐の頭上に破れつゝて」　嗚呼廣瀬武夫六尺の體僅か一片の肉塊を殘し落花みぢんとなりにけり落花みぢんとなりにける

一世義烈赤穗里　三代忠義楠子門
憂憤投身薩摩灘　慷慨就刑小塚原

君が作りし唐歌の正氣の歌の一節は古人に恥ぢぬ眞心を
「段其儘茲に軍神」　花は櫻木武士の後の鏡となる神の音も
とゞろに殘るらん音も「段とゞろに殘るらん」

（註解）「吉成湖中佐は櫻狩同樣なれど吟枝前は在た詩後にあり」

○月花

月と華とは昔より。誰が樂まぬ人やある。誰。「段悅ばぬ人やある」「大左は去りながら月華も。心につれて憂草の種となれるも多からぬ。足柄山の松風に吹合せたる簫の音も。是より

遠く奥州へ。軍となれば身の末は死ぬか生るか。白河の關をば雲やへだつらん。勿來の關の春の暮。駒を止めて詠むれば都の空は花曇り。鎧の袖に散かゝる。櫻の雪は將軍の鬢の霜より尙白し。戟の枕に夜は慣れて。秋の哀れも知らざれど。越山月の最と白く。雲間を渡る雁かねも都の空へ歸るぞと思へば我も懷かしく。花の都は荒果てゝ何處が我が身の置處今宵一夜の宿賴む櫻の露に袖濡れて。滅亡秋に極まりて。「段平家の末ぞ悲けれ。俠人原の讒により。諫の言葉容れられず。（略）二人ともなき賢人は）。（略）筑紫の浦の詫住ひ。）（略）御衣を拜して涙な

る心の底は如何ならぬ)。(大十字を記す櫻の木。我が赤心を申さんになどか他言を要すべき月の光や花の香や)。　幾萬年を經る迚も。更に變りはなきなるに常なきものは世の治亂。月を見て醉ひ花を見て眠れる春の手枕。只一場の夢の間に移る興廢存亡の世の成行ぞ無常なれ。去れば世間の諸人よ。眞心引起し國の光を東海の月よりも倘輝し。國の譽を美吉野の花よりも倘芳ばしく。「級」するこそ今の勤なり」。　誓て斯くもなせし後。樂しき月見をしてみたや。樂しき。「世間」花見をしてみたや」

註解　當月花は若木の花に同樣ふるなり見て畧す

○小督

頃しも秋の半の空。詠めがちなる御袖の。涙の露を拂はせ給ひ。宿直に侍ふ。彈正の大弼仲國を召され。如何に仲國。「小督の行衛を知りたるか」。「大内裏を逃れ出しより」　嵯峨の邊に聊かの知已便りて。あると聞く汝如何にもして尋ね出で此文傳へよとの仰せなり。仲國賢まり。只嵯峨の邊と計りにて主人の名をだに知らざれば尋ねむ樣はなけれども。小督の殿は世

に知られたる琴の上手に在すれば。今宵最中の月影に。君の御上思し出。一曲調べ給はん事よもあらじ。兎にも角にも尋ね出参らせて。叡慮を安め奉らんと心に思ひ定めつゝ。賢まりぬと聞へあげ。直に御前をまかり立。寮の御馬に打乗りて。「中納言殿」。「月に鞭を揚げ。」をじかなく此山里と詠じけん嵯峨野の奥に分け入れば閃き渡る白露に尾花が袖も打濕り。鳴きかわしたる虫の音に。浮世の善惡も思れて獨心を痛めつゝ。家ある毎に立寄りて。「殿問へ」と知るもの更になし」。如何はせんと駿を立。只茫然とありつるが若し寶林寺にや在すらん。龜山

近く到りしに。「中納言」。しづがき遙に聞へけり」。峯の嵐か松風か尋ぬる君か琴の音か。とめつゝ行けば。一村の松の影なる片折戸中に聞ふるつま音を。手綱緩べて就々と聞けば誠や月花の御遊のむしろに侍りて。御笛つかうまつりし時。聽覺へつる調にて。殊更曲は想夫戀偖は紛れもあらじてと腰より用笛脫出し。少し計り吹き鳴らし。頓て駒より飛降り。門をほと〳〵叩き。これは仲國「大納言」内裏より御使に參りたり」。開けさせ給へ〳〵と訪ふに。琴彈差し靜まり却て音もなし。稍やありていたひけしたる。小女房。顏計り差出し。怪の賤が伏せやに。内裏よ

り御使など給はるべきに非ず。門違ひにや御在すらん。仲國は生まじりに依賴しては。門さゝれんと思ひければ。是非なく押して内へ入り。妻戸の縁に進み寄り。何迚斯る處に御渡候ぞ。君には明暮思沈ませ給ひつや〳〵供御も聞し召さず打解御寢もならせ給はず御命さへほと〳〵御覺束なうこそ見へ給へり。斯く申さばうはの空にや御在すらんと。御消息を參らすれば。（御）あらなつかしの雲井やと）。（御）御文顏にあて給ひ。暫し言葉も涙の雨に晴たる月も曇るらん）（御）仲國も。座にせき來る涙を押へ兎角慰め參らせつゝ表の衣絞る計りになりにけり。

稍やありて御かへり事引結び。女房の裝束一重取揃へ給ひければ、肩に懸け。君には左こそ待わびて在すらん。重ねて御迎には參るべ〳〵待たせ給へと言捨てゝ。「（御）駒を早めて立歸りて。ありし次第を殘りなく。奏する程にほのぼのと。秋の長夜も明けにけり。秋の「（御）長夜も明けにけり」。

註解　當小督は若木の花に同樣ふるを以て略す

○迷悟もとき

世の中は迷ぬが故に三界は暗し。一心悟れば。十方世界は廣く

心して。地獄も我鬼も我にあり。佛も。「淨土も他に非らず」。

「大佛とは何を岩間の苔衣。」　只其儘の姿にて慈悲より外に宿心はなし。諸事何事も腹は立とも言葉は殘せ。言葉少なく純直にして誰も人には情あれ。情は人の爲めならず。まはり廻りて小車の。後は我身に報び來る。憎まるゝ人には尙も能くしなへ見よ。「玄なへば深き友達となる」。　仁者に敵なし。去れば古人の言葉にも。『聖人は人を譏らず。』　大海は塵を擇ばず善惡は友にこそよる。我が好きに人の惡しきは莫きのもよ。友は鏡となるものぞかし。枝高きとて風に朽木はあだ折ぞする。老も若も惡しき心を拾てゝ見よ。「何國の里にも住みよかるべし」。　皆人は身をふくにこそ人は。秋風がちがまん。我力我心を拂ひ捨。彌陀頼む心は。西へうつせみのもぬけ。

註解　當迷悟ともに一貫して茲に略す

墨繪

○墨繪

心とは何を云ふらん不思議さよ。墨繪に書きし松風の音。況や

此の代を。諸方十生と聞時は。峯の嵐も法の聲。邪生一如と見る時は。「迷ひも悟もなかりけり」。「萬法一如と觀ずれば。」谷の朽木も皆佛更に不審はなかりけり。三界に身は安からん小車の我惡業に引かれ來て。錦の紐を何時か解くらん四つの邪の。一の箱にたゝまれて何時も苦敷貧慾の。深き流れに身を沈め。浮ぶ甲斐なき我身一を如何がせん。夫れ人間の習にて昨日の迷ひを今日さとる。如何に悟りし人とても。明日は迷ひし事もあり。人の上とて左のみ云ては如何がせん。物の報いは物毎にある。「おもれ木に如何なる花や咲きぬらん」實に

なりておそ思ひ知らるゝ。豫て後生を思ひ知れ生は死の本逢ふは別れのはじめぞと誰も云ひける言の葉なれど。昨日今日とは思はざりけり。皆人は。時に至りて。歎き哀しみするこそ。「袖に露置く斗なり」。生死烈しき世の中に。人には長く添はぬ物よ。只何事も腹は立ても言葉は殘せ。千歳此代にある身の如く堅貪邪見は諸事無益。僅か此代は假りの宿。氣は朝々と心廣くも能く持ちて。法の道には誰れも深かれ。極樂の只一筋法を。誰に尋ねん。佛ならでは知ろし召されん。佛とは。「何を岩間の苔衣。」只其儘の姿にて慈悲より外に宿心はなし。是

れに付けても皆人は。親子兄弟夫妻が中。又は朋友の中迚も此代計りの契りなり。死して行く身の野邊迄は。娑婆の情に我も誰もと供を致ども。（野邊より先きは只一人今は冥土に赴かん先立つ者こそ哀れなり。今日迄は人を送りて歸りしが。何時又我は送られて人を返さぬ涙川幾瀬渡るも淵なれば御法の船こそ戀〳〵けれ）。是に附けて皆人は。老若男女に至る迄。慈悲をも願へ。慈悲萬行の功力に依りて死して後。極樂の涼しき風に浮かべば。「即心成佛疑ひなし」。身は獨立の緣となる。只人間の歎きの。中の喜びとなる」。

註解　當繪は若木の花に同樣なる見て略す

○蓬萊山

目出度やな。君が惠は久方の。光り長閑き春の日に。不老門を立出でゝ四方の。景色を詠むれば。「峯の小松に雛鶴住み、江。谷の小川に龜遊ぶ。君が代は千代に八千代に磊の巖となりて苔の結まで。命ながらへ雨塊を破らす。風枝を鳴らさしと言へば又。堯舜の御代も斯くあらん。箇程治まる御代なれば。千草萬木花咲。實る五穀成就して。上には。金殿樓閣の甍を並べ。下に

は民の竈を厚くして仁義正敷御代の春。蓬來山とは是とかや。君が代の千歳の松は常盤色變らぬ御代の例には。天長地久と國も豊かに治まりて。弓は袋に。「段」劔は箱に納め置く。」諫鼓苔深ふして。鳥も中々。「一番」驚く樣ぞなかりける。」

註解　當落來山は金剛石同樣なれど中がんあり

○城山

夫れ達人は大觀す。拔山蓋世の勇あるも。榮枯は。「ふ」夢か幻ろしか」「一ん」。「ひか」、大、隅、山、の、狩、倉、に。

眞如の月の影清く無念無想を

觀ずらん。何を怒るやいかり雄の。俄に激する數千騎。勇みに勇むはやり雄の騎虎の勢ひ一徹に止まり難きぞ是非もなし。我が身一つを打捨て若殿原に報いなん。「ろ」明治十年の秋の末諸手の軍打破り。打つ討たれつ頓て散る霜の紅葉の紅の血沙に染めど顧みぬ。「ロ」薩摩武雄のをだけひに打散る玉は板屋打つ霰たばしる如くて面を向けぬ方ぞなし。「ロ」木だまに響く鯨波の聲百の雷一時に落るが如き有樣を隆盛打見てほゝそ笑み。あな勇ましの人々や。亥の年以來養ひし腕の力もためし見て。心に掛る事もなし。いざ諸共に塵の世を。脫れ出ん

は此時と。唯一言を名殘にて桐野村田を始めとし宗徒の輩諸共に煙と消ねしますら雄の。「心の内こそ勇々しけれ」。官軍之を望み見て。昨日迄は陸軍大將と仰かれ。（註）君の寵遇。世の覺へ。（註）比ひなかりし英雄も。今日はあへなく岩崎の山。下露と消へ果てゝ。移れば替る世の中の無常を深く感じつゝ無量の思胸に滿ち唯だ悄然と隊伍を整へ目と目を見合す斗りなり。折しもあれや吹下す。城山松の夕嵐。岩間にむすぶ谷水の「註段無情の音も何となく。」悲鳴するかと聞なされ。衣服の。「註段袖を濡し候はん」。

註解　當城山は薩摩本[illegible]
出は[illegible]音に[illegible]
は必ず大[illegible]

○常陸丸

征露の軍もやう〳〵に進み〳〵て南山のけんそも既に打破り音に聞へし要害の旅順口をも閉されて鷲の住てう滿洲も君が稜威の旗風に「註段今は靡かぬ草もなし」。「心筑紫の島離れ玄海灘の只中に」吹く汐風に日の丸の旗飜がへす常陸丸佐渡も續ひて進み行く船路の果は白浪のよるべやいかに

遠からん何をあらぶる荒汐の逆巻中の黒煙只一筋に走り來て我を取り巻く敵の艦こは何事ぞと云ふ間なく亂射亂擊雨あられ進み逃れぬ暇もなく千里を走る猛獸も水に入りては如何にせん萬里をかける大鳥も浪に翼さはうたれぬべし心計りははやれども運送船の悲しさは進退茲に谷りて詮方なくも敵艦に任せ果てしぞ是非もなし。　佐渡は如何にと眺むれば霧に隔たり分かねども同し樣なる運の末輸送指揮官須知中佐最は是迄とや思ひけん大久保少尉の捧げたる聯隊旗をば手に受て（都の方を伏し拜み火を放ちてぞ燒きければ。　各將校も皆な取々に貴重の品々燒き捨てぬ）。（中佐は軍刀拔ぎ放ち無念の心やる瀨なく萬歲唱へ悠々と腹かき切てぞ失にける）。　連なる將校を初とし下士兵卒に至る迄眼を開き齒を嚙て同し枕に伏もあり海に投じて死するもあり敵彈益々加ふれば甲板上は忽ちに「死骸の山」を築き、つゝ。　流るゝ血汐に玄海の浪は赤にぞ變じけるあわれはかなや常陸丸君萬歲の聲細く我が武勇の將士等が無限の恨打乘せて浪の泡とぞ消へにしは明治三十まり七歲の水無月十五日の暮つ方夕日は浪に落ざれど霧立ちかすむ大海

原は白黒も分ぬ計なり實に忠烈の大丈夫が「十歳の間朝夕に磨き鍛へし日本刀」。試さぬ敵を前に見て遺恨の刃一太刀も報ん事も泣く計り駒のひづめに滿洲をふみにじらんも夢なれやウラル、バイガル打越ぬあらまし事もまぼろしか「思へば無念の極みなり」。嗚呼、一聯隊の我が勇士水漬く屍と消へしかど國に殉せし大丈夫が清き其名は萬代もひゞきの灘に立つ浪の消ゆる時なく仰がれん「末迄遠く流るらん」。

註解　常常陸丸は城山に同様の故に[illegible]

橘大隊長

奥大將の下にある大島縱隊の關谷聯隊は首山堡の戰に橘大隊長を失なひし其概略を奏んに「聞もの誰か泣かざらん」「明治卅まり七歳の」。八月卅一日にいと堅き石原聯隊を先として遼陽一の要害を嚴くおそわしめたれど損害のみ多くして終日苦戰をなしければ大島將軍は豫備隊なる關谷聯隊を殊更に先登部隊と定めける橘大隊長は外陣に立ちて進めば道すがら風去ようとしてなまぐさく月もうろうとし

て水眠る夜は丑寅となりし頃大隊長「號令を下すや兵皆勇み立ち獅子奮迅のときの聲天地も裂けん斗りなり斷崖絶壁をよぢ登り攻め入る迄の間には九拆なる二筋のほりをたてとし敵兵ははげしく銃丸打出す鬼神を挫く我が兵も苦戰に苦戰を重ねては功少くして害多く橘大隊長は牙をかみ阿修羅王の荒れたるが如く大和劔を振りかざしほりの中へとつ踊り込み大喝一聲叱咤してさへぎる敵を右左りくも手かくなは十文字八ッ花形と云ふ儘に露は朝ごもと斬て捨つ。かゝる勇猛の擧動に部下の將卒感げきし大隊長を打たすな

と異口同音に呼はりてほりとも云はず斬り入ればさしもに堅き敵るゐも忽ち落ちて日の御旗るゐ上高くひるがへり萬歳の聲は止まさりき敵は無念に堪へ兼てときを作て三方よりいとゞ烈敷銃火をばそゝぎ掛れば香ばしき花橘の大隊長弓手肩先ききらひなく深手淺手を負ひたれど從容自若神の如自からきずに繃帶し四方を見卸す絶頂に動きもせずに直立し敵情つぶさに見てあるを内山軍曹呼びかけて大隊長殿危けんなり遺憾ながらも此の場合一時退却なさらずば大隊總て全滅せん此時大隊長は初めて身をば動かして涙を押へ

劍をなで部下のかくまで倒るゝを見ては己れは堪へられず
しかし軍曹考へよ今日は八月卅一日にて恐れ多くも畏くも
東宮殿下の御誕辰日ぞ　かゝる貴き日に當り部下三分の
一を死なしめて漸く取りて敵るゐを見捨て　彼れに與へ
んは返すゞも無念なり許せ軍曹辛くとも今上陛下の御爲
めと帝國陸軍の其爲めに我と枕を並べつゝ共に戰死をして
呉れよと云ふを聞き居し軍曹は只感涙にむせぶのみ此の時
敵彈飛來り大隊長は深疵を再び負へば鬼神をあざむく勇士
もあほのけにドット音して倒れけり內田山曹驚きて大隊長

殿〳〵と呼はれど空を横切る砲丸の響きの外には音もなし
あたりつゝゞ見廻せば大隊長の云はれし如く友と頼みし
友は皆陛下の御爲め國の爲め死してはかなくなり居れ　詮
方なしに軍曹は大隊長を肩に掛け韋陀天走りに坂道をろ
ぶが如くかけ下りて小松原に出し時二人諸共敵彈に胸と腹
とを打拔かれ再び此處にぶろびけり暫くありてほのゞと
明け行く空に秋風は身に冷み渡り虫の音はいとゞ哀れを添
ふる折しもあれ大突貫の聲に二人とも目を見開けば軍曹は
已が痛手は打忘れ眞心こめて呼び起し大隊長殿疵淺し氣を

シカト持たれよと呼びさまされし大隊長兩眼クワツト見開きて（我は此儘捨て置けよ。）（只多くの部下を殺せしは天皇陛下に對し奉りても我が國民にも相濟まぬ。）（我の骸は朽るとも魄玆に止まりて砦は堅く守るよと微かの聲に力あり。）

内山軍曹こらへ兼ワツト斗りに泣伏て暫言葉も出ざりき斯くてあるべきにあらざれば軍曹は大隊長を背に負ふて行かんとすれば力なき足は辷りて打倒れ又起き上れば又打倒れ心は千々にはやれども胸の深手をいかにせん是より先きに大隊長はちよう愛しつる從卒の伊藤金次郎に命ず

らく此曉き方に突貫の聲ある後に銃聲の絶へたるを聞かば勝利なり直に馬を引き來れ我は追擊に移るべし若又銃聲絶へざれば我は戰死の時なるぞ汝よく〳〵心得て我の骸を持ち歸れと云ひ付けられて從卒が戰況如何にと窺ふに「山も崩れぬ突貫の聲は玄きりに聞こゆれど」　銃聲更に絶へざれば氣も魂ひも身に添はず走せ付け見ればコハ如何に大隊長は軍曹の背に負はれて淋りたる血汐に染みてありければ目には涙の玉あられたばしる如くに飛び付きて大隊長を已のが背に移し替へつゝ泣く〳〵も「味方の陣にぞ歸り

ける」。嗚呼曾て東宮殿下の御側に仕へ奉りし勇將も數ケ所の疵に堪へ兼ねて首山堡頭の朝露と消へはしたれど橘のかほりは遼陽の空より高くにほうなれ空より「高く匂ふなれ」。

註解　當橘大隊長は旅順に同樣の故に略す

威海衛

名も高きぼつ海灣の咽喉なる威海衛の戰に我が聯合艦隊司令長官伊東中將の手足の如く卒る水雷艇の功勳は「聞く

も中〳〵勇ましや」。敵の艦隊勇々敗走。威海衛の要害に防材堅く布設して灣内深く潜みつゝ戰ふ樣も見へざれば我が聯合艦隊は朝の雨雪に身を浴し夕の風に櫛り只遠近を取り卷きて空敷時日をすごせしが我が陸軍は日島と劉公島を除く外敵の砲臺悉く攻取たりと信號の旗を見て伊東司令長官は急に水雷艇の司令を召「水雷攻撃を命ずれば」藤田餅原の両少佐今井大尉の各司令姿勢を正して申す樣そは我々が望む所去ど又僅か防材の切目をめざし暗礁多き海なれば誓て功は奏せむものゝ水雷艇は悉く再び此處へかへ

るまじさらばと斗り立あがり誠忠面にあらわれしを司令長官もそゞろに感じ落す涙も國の爲め思ひ切てぞ別れける夜も早更けて月影は威海衛の山に隱れ白黑も分かぬ眞の暗敵兵夢を結ぶ頃我艇隊は〔　〕第六號艇を先鋒として百尺崖のこなたより浪をけつてぞ進み入る其勢は矢の如く港灣内に突き入れば斥候の敵艦之れを知り信號の光りひらめくや灣内にわかに騷ぎ立ち打出す速射の砲丸は雨かあられと降る中を物ともせず我が艇隊は忠義に身をや捨て小舟縱横無盡に馳せ廻る第九號艇はすばやくも巨艦間近に進み寄り魚形

水雷をくすれば水煙一度にドット起き命中の音天地もさけん斗にて艦隊中ば沈めらる。　其の翌の夜も此處や彼處に水雷の物音すごし斯く堅城鐵壁と頼みたる旗艦定遠をはじめとし來遠威遠も沈められ戰闘力もつきぬれば丁提督思ふ樣かくなる上は是非もなし兵士斗りは助けんと比は明治の廿八二月十二日の朝風に靡くや白旗立て降伏の使節の船ぞ見へにける武士は物の哀れを知るとかや伊東司令長官は丁提督の請を納れ聊か心をなぐさめんと送り物をぞつかわさる丁提督は悄然として我が事已に終りぬと心靜かに自害し

て（武士の道をぞ守りける）。（嗚呼昨日迄も今日迄も清國にそう〳〵たる北洋艦隊の司令官）。（丁汝昌とも仰がれし身の斯くなり果つるは敵ながら又と難得英雄の末路の程ぞ是非なけれ）。　茲に威海衛を占領し砲聲全く治まれば風雲忽ち一變し威海の淵にうづ卷きし鎭遠號を初めとし濟遠平遠廣丙號其外砲艦數十艘檣頭高く雨を呼び雲を起せし黃龍も（大和劔に角を斷ち）。　忽ち旗は日の丸の輝き渡る軍艦旗君が威稜は天が下仰がぬ者こそなかりけり（仰がぬ者こそなかりけり）。

註解　當威海衛は城山に同樣なる故に略す

○奇緣

良禽は樹を見て住み良臣は主をゑらんで仕ふとかやこゝに故左馬の頭源の義朝の末子牛若丸と呼ばるゝは父義朝うたれし後母諸共に生捕られいまだ白黑も分かぬ身の出家になれとて行先きは（鞍馬寺にぞ送らるゝ）。（大か月日に關の、、、、なく〳〵と明かし暮らして人となり思へば無念やる方なく平家を打て父の仇報はでなどか止みなんと獨り心をいため

つゝ浮節繁き呉竹の夜な〳〵寺を忍び出で月清水の觀音に今よいも歩を運ばせて心願成就させ給へと心をこめてぞ祈らるゝ扨又西塔の武藏坊辨慶は獨りつく〳〵思ふ樣かゝる亂れし代に生れ墨の衣を身にまとひ花香を取て佛前にあたら此世を此儘に朽ち果つる身のあるべきぞよしや不動の利劍を振ひ人を切とも殺すとも亂れぬ此代を鎭むべき功だに立たば中〳〵に衆生濟度の道ならんいでや心の儘にふるまひて後世に名をも揚べしと既に不敵の心を起し夜な〳〵洛中を徘徊して往來の人を刼し「大力太刀刀を奪ひ取り」。人の剛慮ためしみるに手に立つものゝあらざれば愈々我慢增長し今宵も清水の觀音へ參り群がる人をのぞきしに年の比十四五斗の公達が讀經なしつゝおわするを牛若丸とは露知らず近くさしよりうかゞうに容顏誠に麗敷只人とは見へざりしがよく〳〵見れば紛れなく先夜出逢ふて不覺を取り無念の殘る其小性よき處にて出逢ふたり思ひ知らせんと悅びて牛若丸の歸り道「義經」うかゞひてこそは居たりけれ。機敏達智の牛若は早くも夫れと悟りしがそしらぬ樣にて經を終へ悠々寺内を立出で五條の橋にさしかゝる（比しも秋

の中ばの空。更くる川風身にしみて月澄渡る橋の上行くともなくに歩みつゝ。往來の人も影絶へて心すごけに誰れ聞けと腰よりようちよう拔き出し吹きすさみつゝ渡り行く。待ち設けたる辨慶は黑皮おどしの大鎧くさづり長に着流しつゝ例の薙刀杖につき牛若丸の行く先に立塞がりて云ひけるは「汝か如何なる人ぞかゝる夜更けて只一人見ればよき太刀佩かれたり我に與へて參られよ左なくば通り得させじとハタトにらんで立たりける牛若聞てアザ笑ひはしくば此太刀取て見よムザト得さするものかわと云はせも

敢へず辨慶は　なぎなた取て引ぶりぱめ憎き小性が云ひ條かな去らば斯くぞと切てかゝる牛若臆する氣色なく靜かに薄衣引のけて太刀拔きかざし渡り合ひ暫し戰ひ攻め合ひしが疊み重ねて打つ太刀にさすがの辨慶あしらひ兼ね橋桁二三間飛びしざりいたく膽をぞ消したりける去れど甲斐なき少年に何程の事のあるべきぞ更に勇氣をはげましてなぎなた柄長にヲツトリ延べ走りかゝつて薙ぎ拂へば左にはづし右にさけ裾を拂へば踊り越へ頭をなけばツヒクヽリ前にあらわれ後にせまりさながら花にたわむるゝ胡蝶の如く空に

飛通ふ燕に似たり辨慶秘術を盡せどもさらにすがたも認めず次第に氣力もつかれ來てたゆむすき間に辨慶は薙刀もろくも打落され。只茫然として立たりける不思議や御身は如何なればケ程けなげにおわするぞ委敷名乘らせ給へと言葉を更め云ひければ我は源の牛若なり御身は誰ぞと問ひ給ふ扨は義朝の御子牛若丸にておわするか我は西塔の武藏坊辨慶なり無禮の段は赦るされよ是より主君と賴まんと茲に主從の緣を結び薄衣かつがせ奉り牛若丸に從ひて　一丸條の御所へぞ參りける。斯くて平家を亡して共に譽れの高き名は永く月日と輝きて蝦夷が千島のはて迄も　一知らぬ人こそなかりける」。

註解　當奇緣は城山同樣ふれご吟醫間に在て崩後にあり

○潯陽江

紅葉うつろひあしが散る秋の哀れもいと深き潯陽江の夕まぐれ友の船出を送り來て　一別れをおしむ盃の　一「大ん」數重なれご、糸、竹、の。調もそわん淋しさに本意なき事と思ひつゝ影遠白き浪の上に月打守る折しもあれたちまち聞ふゆる琵

琶の聲思ひもかけぬ事なれば互に心ときめきて歸らん事も行く事も忘れ果てつゝ其聲を尋ねて誰ぞとおとなへば打ひそまりて答なし船こぎ寄せて酒をさへ燈かゝげ又更に宴のむしろ打開き琵琶の主を招けども頓には出で來ず百千度呼び立られてしぶ〳〵に此方の船に移り來ぬ琵琶を抱きてまばゆけに面を負ひ彈き初し其搔音に云ひ知らぬ深き情の籠りつゝ。彈行儘に常々の己が心のうれたさを訴へ出る心地せり人こそ知らぬ濱ゆうの百重重なる浮き思積る恨の數々を四筋の糸にいはすらん輕〳〵うちゆるくひねり初め

にはげいしようを奏なで後には六ようを彈しけり

大絃嘈々如村雨　小絃切々似私語
切々嘈々錯雜彈　大珠小珠落玉盤
間關鶯聲花蔭滑　幽咽泉流水下灘
水泉冷澁の趣こりて糸をたへ暫し聲なき其程はそゞろにうれいを催して聲あるよりも中〳〵に風情を添へし折しもあれ忽ち響く搔の音銀瓶くだけて水迸しり。一時に軍起りて打物のしのぎを削るにさも似たり」。曲もいまわとなりし時搔を納て四ッの緒を只一せいにかきなせばさながら絹をさく

如し東の船も西なるも只消然と聞きとれて物云ふ人もあらばこそ秋の浦風身にしみて水底白く澄み渡り月の影こそ更けにけり衣を裝ひ居なほりて語る言葉もくごもりて『妾も本は都なるがまの凌下の生れにて。十三歳の頃よりも琵琶の上手と代に知られ玉を飾れる宮の内黄金を敷ける臺にも召上られてみやびをの彼方此方の會にも招ぎよせられたわれあいさゞめきかわし綾錦かつぎ歸れば家も富み身も榮へつゝ代の中はかくある者と思にも思ひ頼みて花の春（紅葉の秋と等閑に）日を經るからに同胞に親族に

離れ夕行き朝來りて顔花の〻盛りもいつか過ぎの門馬も車も寄り來ねば代渡るたすき盡き果て身を浮草の根をば絶へ。水のまに〳〵さそわれて情も淺き商人を夫とするだに悲しきを其夫遠く旅立し此浦船に夜を守る月明に水寒し更け行く儘にまどろめば我が身の盛り夢に見ていとゞ悲しさ增さりぬと語るを聞ひて思はずもフトキ溜いきつく〳〵と琵琶を聞くだにかなしきを此物語りの哀れさよ初めて逢へる其人と身の際こそはかわれども我も同く浮沈み去年より此處へさすらへて、潯陽城の片ほとり芦と竹との生茂る汚き

中に家居して朝夕に聞くものは高根のましらほとゝぎす樵夫の歌や揚巻が吹きなす笛の音計り却て胸を痛めつゝ昔聞きつる糸竹の音なづかしく思ひしに今よいの君が琵琶の音は天つ乙女の音樂を聞く心地していと嬉しいなむ事なく今一ツ彈ひて聞かせよ我も又歌を作りて送らんと云へば實もと思ひけん又も彈きなす搔音は一段前の聲よりいそがしく。物すごければ江洲の司馬は更なり並み居たる一段人も袖をぞしぼりける。

註解　當潯陽江は若木の花同樣ふれど詩吟在り

○川中島

吉水經和作

天文二十三年。秋の央ばの頃かとよ。上杉謙信は八千餘騎を從へて。「一段川中島に打て出づ。」「我此度の戰は。」武田信玄を追つめて親く雌雄を決せんと。渦卷かへす犀川を渡りて陣をぞ取にける。信玄は此事聞くより早く二萬餘騎に打て打迎ひ。砦を固めて戰はず。謙信氣をいらち。村上義清に云含め。月影暗き山々の草葉の露を分けさせて。彼方此

方に兵を伏せ。樵に擬せし兵ものを。出して甲斐の兵營に。近付かしむれば。甲斐の兵。謀とは露知らず朝霧のまに追まくる。待設けたる伏兵は時こそ來れと勝鯨波をドッと揚げつゝ引つゝみ。袋に物を取る如く一騎も洩さず打取たり。信玄怒つて軍勢を雲霞の如く繰出せば謙信も備へを立てゝ打向ふ。龍躍て雲を起し虎嘯て風を呼ぶ勢ひ破竹の如くにて入亂れ入亂れ責戰ふ有樣は颶風砂を卷き百雷岩を拔に異ならず。甲斐の勢退けば越後の軍之れを追ひ越後の軍退けば甲斐の勢之れを追ふ兵を合すること十七度。何れ

を勝としらま弓。引かと見へし信玄が一手の勢の旗を伏せ。川を渡りてよしあしの。隙を窺かに忍ばせて。勇み立たる謙信が麾本近く進み寄り。面も振らず切て入る。麾本の軍勢は思はぬ勢に破られ走る跡より甲斐の勢鯨波を作て追かくる。宇佐美定行之を見て猛虎の如く憤り憤馬を驅て大音に我手の勢に下知をなし。敵の横合より無二無三に突入て淵瀬もいはせず追び落す。信玄度を失ひ流を亂して走る處を謙信只一騎赤栗毛の逞ましきに鞭をあて。堅子何迄逃るぞと云ひも果さず切つくる。信玄刀を拔く

に暇なく軍配扇にて受たれど團扇は二つに折られたり。」

降と見て傘とるひまもなかりけり河中島の夕たちの雨

と。謠ひし如く二の太刀ははや肩先に切り込ぬ。あつと云ふ間に信玄の。命は岩に碎かるゝ。泡と消なん危きを救はんとして。軍兵が心は矢竹にはやれども。水駛くして近寄れず。大將原大隅。『鎗を延して謙信。』を突はしたれどあだ突し』。斯てはならじと鎗を擧げ。只一打にと打たりしが。馬にあたりて馬逸す。謙信は駒を沈めむと。手綱かいくる其隙に信玄は虎口を遁れ去りにけり

鞭聲肅々夜渡河
曉見千兵擁大牙
遺恨十年磨一劍
流星光底逸長蛇

かく信玄を打洩したる。謙信の心の中は如何ならん。「思ひ遣るだに無念なり」。信玄は肩の痛手に絶へかねて。其夜の中に軍勢を纏めて出る月影に。道を求めてはるばると。

「我故郷に歸りける。」

註解　當川中島に城山同様ふれこ屏二ヶ所及詩吟まで

○俊寛

初段

あだまもる筑紫のはての薩摩潟鬼界が島のあら磯に治承元年夏五月、流され給ひし人々は。「右近衛の少將成經。」撿非違使平の入道康頼法勝寺の執行俊寛僧都の三人なり、うき艱難を此島に、送り給ふ其うちに、大赦の令をぞ傳へらる、思ひもかけぬことなれば、あらありがたき御諚やと、二人ひとしくひざまづき、うや〳〵しくも令狀を押戴きて成經は、うれし涙に袖ぬれて、聲もふるへてさら〳〵と、讀得給はぬ形勢を、康頼取りてやう〳〵に、よみあけたまふ、趣きは、「この。

たび中宮、御産の御祈禱に、非常の大赦行はるゝにより鬼界が島流人のうち、成經康頼を赦免すと、讀給ふ時俊寛は、あつと驚きかしらを、揚、何とて某が名を、讀落し給ふぞと、言葉せはしく問給へば、康頼も、打驚きて聲うるみ、實にいぶかしきことなれど御名は更に見ゐ侍らず、俊寛聞て、扨は筆者のあやまりか、今ひとたび、よませ給へとありけるを、使の元康すゝみより某都にて承り候も、成經康頼のふたりは御供いたせ、俊寛ひとりは此島に殘し申せとの御事なり、嗚呼こは如何に何事ぞ、罪も同じく配所も同じ、非常も同じ大赦なるに、獨り誓ひのあみ

にもれ、沈むは何の因果ぞや。（謡）けふまでは、三人一所にありてすら（謡）さもおそろしくすさまじき、荒磯島に只ひとり、離れて海士の捨草の）。（謡）浪のもくづにあらねども、よるべもしらぬうき身やと、歎くにかひもなぎさなる、千鳥と共に鳴ばかり）。思ひにあまる俊寛は、さきに讀たる卷物を、いくたびとなく打開き、あとくりかへし見給へど、成經康頼とあるばかりにて、僧都とも俊寛とも、かける文字は更になし、こは又夢かまぼろしか、夢ならば、さめよ〳〵とのたまひて、獨り涙にくれたまふ。

玉兎晝眠雲母地、　金鷄夜宿不崩枝、　寒蟬抱古木、
鳴盡不回頭、

といふ詩の心はよもく俊寛僧都の身の上と、「（謡）今こそ思ひしられけれ、」

二段

去程に時刻うつりてかなはじと、楫子の言葉にせかれ來て、名殘は更につきねども、成經は夜の衾を、康頼は法華經一卷を、「（謡）各かた見に殘し置き、」「（大かさ）さまく〳〵なぐさめ參らせて」。船にのらむとし給ふを、俊寛袂にすがりつゝ、元康聲をあらゝ

げて、僧都は叶ふまじといひ放つ、嗚呼うたてやな公の私といふことあれば、せめてむかひの地までなりとも情にのせてつれ給へと、涙を袖につゝみかね、のたまふ聲の終らぬに、哀れや無情の楫子どもは、櫓櫂を振揚うたむとす、俊寛今は、叶はじとや思ひけむ、すがる袂の手を放ち、一時は宿に歸らむと、踵はあとにかへせども、かへらむものは心にて、楫子の無情も元康の怒る言葉も打忘れ、又立寄りて出船の、綱にとり付引とむる、楫子ども綱をおしきつて、船をふかみに押いだす、せむかた浪にをどりこみ、船よ〳〵と呼はれど、かへす模樣もあらざれば、ち

から及ばず俊寛は、もとの渚にひれふして、（彼の松浦さよ姫の）。（歎きもわれに及ばじと、悲しみ給ふもあはれなり、瑞を感じては、花にも涙をうゝぎ）。（別れをおしみては、鳥にも心を動かすと、いふことあれば人どして、ながき別れの悲しみをしらぬものこそなかるらめ）。　されば成經も康頼も涙ながらにさし招き、われら都にのぼりなば、善やうに取りなして、やがて御迎に參るべし、心強く待たせ給へと、宣ふ聲のかすかなるたのみを濱のまつかげに聞やいかにとゆふ浪の、よするまに〳〵俊寛は、只手を合せ頼むぞと、呼はる聲も呼聲も「次

第〳〵に遠ざかる」。船もかすかに人かげも、消ゐて見ゐなく成にけり、消て「幕」見ゐなくなりにけり」。

註解　俊寛は初段二段に分ち初段は廣瀬中佐同樣にして二段は若木の花同樣ふる故に略す

○吉野落（新作段物）

吉水經如作

みよし野の花も立田の紅葉も夜半の嵐に誘はれてあだに散り行く時は又「幕」増て哀れに思ふなり」。「大」弦に二階堂出羽の入道道縕は」。元弘三年正月に六萬餘騎を從がへて大塔の宮の日頃より籠らせ給ふ大和なる吉野の城へぞ攻めよする菜

摘川のほとりより吉野の方を見上れば白旗赤旗錦の旗御山卸に打靡びき雲か花かとあやしまれ麓には敵の大軍すき間なく甲のほしを輝し鎧の袖を連ねしは錦を敷くに異ならず峯高して道細く山けわしくして苔なめらかなり幾千萬の精兵が必死に成て攻むるとも漸く落つべしとも思ほへずかゝる處に「くれ」同じく十八日卯の刻より両陣吐氣をドット揚げ敵攻上れば攻下し互に勇氣をふるひつゝ」。「くれ」此處の谷彼處の峰に馳せ上り攻め合開き合射手を揃へて散々に射立れども寄せ手の勢は皆命を知らぬ坂東武士親打たれても顧みず主

倒れても取合はず」。〔くず〕骸を乗越へ〻〻七日が間息をも續がず攻め戰ふ」。〔くず〕血は草芥を染め屍ねは路頭に横たはるかゝる處に敵の案内者岩菊丸は足輕共に下知をなし」。〔くず〕金峯山の險を越へ木の根岩角よぢ登り在々所々に火を掛けて吐氣を作て攻めければ」。〔くず〕城兵も今は前後の敵を防ぎ兼自害する者もあれば猛火の中へはせ入て死するもあり」。〔くず〕向ふ敵と引組んで打死する者もあれば宮に注進する者もあり大手の堀はたちまちに死骸を以て埋めたり」。宮は此由聞し召し緋おどしの御鎧に龍頭の甲を召させられ三尺五寸の小薙刀

を脇にはさみ屈竟の兵共〔くず〕廿餘人前後左右に引き玉ひ面も振らず切て入り」。〔くず〕砂子を飛し煙を立て東西を打拂ひ南北へ追廻し爰を詮度と戰ひ玉へば」。〔くず〕寄手の勢も此廿餘人に切り立られて風に木の葉の散る如く四方へサット散りにける」。宮は是より藏王堂の大廣間にゆう〳〵と引き上げ玉ひて軍兵と最後の御酒宴をぞ召されける此戰に宮の召たる御鎧は七筋の矢に貫ぬかれほふ先きと二のうでに二ケ所の突き傷負はせ玉へど立たる其矢をも拔がせ玉はず流るゝ血潮も拭はせ玉はず敷皮の上に立ながら大盃を三度迄傾け玉へば木寺

の相模四尺三寸の太刀先に敵の首をさし通し『大聲高かに謠ふ樣』。弋戰劔戟を降す事電光の如く盤若山岩を飛事急雨の如しと雖天帝の身にはちかよらず却て修羅彼が爲に破らるゝと太刀振りかざし舞ひたるは彼の漢楚の鴻門に楚の項伯と項莊と劔を拔で舞ひし時樊會庭に立ちながら幕をかゝげて項王をにらみし勢も「段かくやと思ひ知られたり」。

二段

去程に村上彦四郎義光は殊にはげ敷戰ひし故敵に矢十六筋を射つけられの中の節や袖摺の節より折れて立たるは枯野

に殘る玉萩の「段風に靡びくが如くなり」。『大立たる其矢をも拔ぐに暇なく』。宮の御前にひれ伏て一の木戸は早破れ今二の木戸にて支ふれど連日の戰に軍兵共は皆打死し迚も籠城覺束なし敵四方を圍まん其内に早く落させ給ふべし臣は恐れ多き事ながら召させられたる直垂や御物の具を頂戴し御諱をもおかし參らせて茲にて戰死を仕らんと忠義面に顯はれいと懇ろに申上れば宮は哀に思し召し如何でか去事のあるべきぞ死なば處を替へずして『中吉野の山に馨ばしき名を殘さんとのたまへば』。義光これを聞きも敢ず嗚呼淺間敷仰か

な昔漢の高祖が螢陽に圍まれしとき紀信高祖の眞似をなし楚を欺むかんと乞ひたりしに高祖はこれを赦したりこれ等の御覺悟あらせられずしてよくも天下の大事を思し立たれたり早御物の具下し賜はれと御鎧の上帶解ぎ奉れば宮は實にとや思しけん御鎧も直垂も（吟）ぬがせ玉ひて義光に）。（吟）手づから渡しの玉ふ樣我若し生き延びたらば汝が後生を吊ろはん）。（吟）若又打死なしたらば同じ冥土に伴ふべし是今生の別れぞと）。言葉すくなくのたまひて涙ながらに落させ給ふ義光もせき來る涙をおさへ兼木戸のやぐらに馳せ登り大音

揚けて名乘る樣「大我はこれ神武天皇より九十六代の孫」。今の帝の第三の皇子一品兵部卿尊仁親王なり逆臣ばらに惱まされ恨を泉下に報ひんため只今自害する所なりこれを見て汝等が身に供へたる武運つき腹を切ん其時の手本にせよと呼はりて鎧をぬひて投げ落し赤地の直垂に練貫のふたへ小袖を引寛ろげもろはだぬぎて一刀を「大左の腹へグツト立」。眞一文字に引廻しあけに染みたるはらわたを櫓の板に投げつけて大刀先きくわへうつ伏しに伏して果たる義光が最後の樣こそ勇ましけれ敵兵これを見て大塔の宮は御自害召され

たり御首たまわらんと云ふ儘に四方の圍を打ち捨て櫓の下に馴せ集る宮はこれと引違ひ天の河へと〔くれ〕落ちさせ給ふに敵五百余騎道を遮ぎりければ〔くれ〕義光の一子村上兵衛藏人義隆は父の敎へに從ひて一人茲に踏止まり〔くれ〕追ひ來る敵の馬の諸ひざ薙きては切すへ平くび打ては刎ね落し右へ突きのけ左へけ倒し飛蝶の如く飛び廻り猛虎の如くたけりたて〔くれ〕九折なる細道に敵五百餘騎を引き受けて半時斗戰ひしが如何に義隆剛の者とは云へ其身鐵石にあらざれば〔くれ〕深手の矢創十余ヶ所淺手の創は數知れず今は是迄とや思ひけん

とある竹村に馳せ入て腹かき切てうせにけるやう〳〵此隙に宮は虎口を逃れ高野山へ落ちのび玉ひしは村上父子がみよし野の〔段〕花と散りにし其いさを」。立田の秋のもみぢ葉の赤き心に依るとかや赤き〔段〕心によるとかや」。

註解　吉野落は初段二段に分ち初段は崩二ヶ所にして終りの切りは普通中間の切り同樣にて止め置くふり二段は奇緣同樣ふれど無論崩に長短の差はあるふり凡そ段物にして二段三段とあるものは前の段はいづれも普通中間の切にて止め置き最終の段丈け金剛石等の如く最後の切りを詰ひ夫れより終りの節則ち聲の裏にて詰ひ終るふり

○小敦盛

祇園精舎の鐘の聲。諸行無常の響あり。娑羅雙樹の花の色。盛者必滅の理を顯す。おごれるものゝ久しからず。貴き人も「段落」遂に亡る習あり」。「大かん」扨は此度源氏平家の戰に。」平家方一族母衣大將の其内に。物の哀を止めしは無官の太夫敦盛にて諸事の哀を止たり。敦盛扨も其日の出立は何時に勝れて花やかに先づ肌よりは梅の匂の肌寄せに唐紅を召されたり練絹に種々の糸を以て秋の野の草盡し縫ひ出したる薄紅

梅の直垂に弓手のてつかい兩面の脛當に萠をどしの鎧着てくわ形打たる五枚甲の緒をしめ鎌倉作りの御太刀はかせ廿四差したる大中黑の征矢を負ひ連錢あし毛なる駒に梨地にまき繪したる白ふくりんの鞍をかせ御身かるげに召されしは左も勇々敷ぞ見へにける御一門を初め同敷主上の御供召され濱に下らせ給ひしが敦盛御運の末の悲しさは『中かかん』竹の用笛を内裏に忘れ』。若上郎の悲しさは捨ても御出あるならばケ程の事はあるまじに敦盛が此笛を忘れ置く事は平家末代の恥辱とおぼし召し取りに歸らせ給ひしがケ樣々に

時刻を移す其暇に御一門の御座船も兵船も遙の沖に押出す敦盛は力なくして鹽屋の方を心掛け駒に任て落させ給ふ『心の内こそ不便なり』。「大か是は扨置茲に又」。武藏の國の住人篠頭の旗頭熊谷の次郎直實は此度一の谷の先陣とは申せども未さまでの功名もきわめず無念至極は無りけり天晴此處に勇士の通れがな好敵もあらば〔くず〕押並べ引組んで分取功名せばやと思ふ〕。〔くず〕折節敦盛を目に掛け駒引寄せ打乘り直實頓て大音揚げて名乘る樣〕。〔くず〕其許に落させ給ふは平家方にてもよき御大將と見奉る斯く申す某は〕。〔くず〕武藏の國の住

人篠頭の旗頭熊谷の次郎直實と申すものなり〕。〔くず〕源氏方に於ても隱れなきよき敵にて候きたなくも敵に後を見せ給ふものやな〕。〔くず〕いざ引返し御勝負似へ如何に々々にと扇を揚げて招がるゝ〕。

敦盛は熊谷とは聞ながら落つる味方の兵船に心掛け更に耳にも聞入れず濱邊を差して急かるゝ頓て敦盛遙の沖を御覽ずるに御座船間近く寄せければ斜に悅び腰より日の丸の扇を出し沖なる船を招がるゝ船中の人々其内に門脇殿は最初此由御覽なされ伊賀の平内左衛門基國を御側に召され如何に基國あれを見よ『畏掛武者の只一騎

此船を招ぐは』。左馬の頭行盛か又は無官の太夫敦盛かいづれか見よとの御掟なり茲に惡七兵衛景清承り某見て參らせんと白柄の雉刀おつとり杖につき甲をかたむけ磯邊の方をツク〳〵と打守り嗚呼痛しの御事やなあなたにましますは參議經盛卿の御子無官の方にて渡らせ給ふやな御馬の毛色鎧の袖印に至る迄少しも違ふ處はましまさぬ嗚呼痛はしやとぞ申し上れば門脇殿聞し召し敦盛ならば此船を磯邊に寄せとの御掟なり水手楫取かしこまりにわかにろかぢを立直し船を磯邊に寄せんとすれど此内より吹き續きたる北風の

烈しさになごりの浪は今日も立『中風は競ふて浪は香車の如くなり』。白浪世界にはゞき眞砂を天に揚げければ宛然雪の山の如くなり小船こそ自ら弓手妻手にも押し廻されるものなるに殊に勝れし大船に大勢は召されたり次第〳〵に出れども漂ふ浪にせかれつゝ磯邊に寄すべき樣は更になし敦盛は此由見るより斯くては叶ふべからず最は〔此の駒を泳がせ船に乘らんと思召し〕。〔駒の手綱をかいくゝって海中へッット駈け入り浮きつ沈みつ一たん斗りは出たりしが〕。〔駒逸物とは申せども逆卷浪にせかれつゝ泳ぎ兼ねてぞ見へに

ける」。〔直實此由を見るより如何に平家方の御大將御坐船遙に程を隔てたりしかも浪風荒くしてよもや逃らせ給ふまじいざ引返し御勝負候へ〕。〔返し給はんものならば某射て參らせんと弓に矢を打番ひそゞろに引てかかりける〕。敦盛は落行く駒の手綱を引き止め暫し思ふ樣若しも此處を逃れ落ちんとせしに斯く運の極まる上からは若も直實がさび矢に射止められては平家末代の耻辱と思召しいざ茲にて勝負致さんと相圖をなして駒の手綱を引返し海中よりサット駈け上り染羽のかぶら矢おひちがい斯くこそ詠じ給ひける。

梓弓矢を差しわけて引く時は返す心をしるか其君

と遊ばし給へばは比熊谷も心ある弓取なればハット心に答へ双の鞍をけばりして頓て返歌に

いたづきのはやはづれんと思ひしに矢と云ふ聲にたちぞ

といまる

と返歌をなして「段心靜かに待にける」

二段

去程に敦盛頓て打物の鞘はづし熊谷に〔打て掛れば〕。〔直實シツカト受止め追つ追はれつ受流しつ二騎並んで面も振

らず切り結ぶ」。「未だ勝負も見へざるに敦盛イザ組まんと打物彼處へなげ捨てかけよるを直實共に打物なげ捨て馬上ながらムスト組み互にかわす聲の内一度に鞍ぶみを踏外し兩馬が間にドット落ち上を下へとかへしける」。「痛はしや敦盛は心は猛く勇めども」。強氣の熊谷物の數とも思はねば敦盛を心安く取て押へ首を掻としけれども餘り手弱く思ひ少し引くづろけ參らせて御想合を見奉るに薄げしように金黒なりの有樣はさながら殿上人の年の比十四五斗と打見へて容顏殊に麗敗餘り心の痛はしさに扨は中々平家方にては如

何なる御公達にて渡らせ玉ふやな御名字名乘らせ玉へとありければ敦盛は熊谷に組しかれ世にも苦數息をつき流し扨は中々武藏の國の熊谷は文武二道の士とこそ聞きつるに『中が何とて合戰に法なき事をのたもふやな』。我は天下の寵臣として雲閣の座に連なつて詩歌管絃の道には長じたりし身なれども此三歳が程は一門の運盡き果ていとあこがれしが夫れ武士いさめる道をあらぢ々承るに夫れ武士の名乘ると云ふに互の陣に群がりてやなぐりゐびらを腰につけ互に打物拔持て我は何國の何某と名乘てこそ勝負は致すものなるに

我はまだ敵より押へられ其下より名乗ると云ふは今こそ初めて承る熊谷とありければ直實承り仰は左なれども首を取り武藏に歸り此直實が譽を顯はさん其爲めに御名字名乗らせ給へとありければ敦盛詞に夫れは隱れもあるまじ只某が首を取り御邊の主の義經に見せ玉へ若も義經見知らずば蒲の冠者に見せて問へ蒲の冠者が見知らずば此度一の谷の戰に平家方生け取りのものども多くあるべし彼の者共に引向ひ誰が首とも分らずば其時こそ名もなきものゝ首と思ひ只草村に捨て玉へ熊谷とありければ直實承り『中々扨は中々武士

の勇める道を』。『大か委敗しろし召さるよな』。世に物浮き者は我等斗に候ひしが君の御意に隨ひ御身を助けんとすれば親と合戰子と爭ひ花の下なる半月の影一夜の友は清風ろう月飛花落葉の如くなり此度の戰に熊谷が參り逢ふ事は又前世の事と思し召し御名字名乗らせ玉へ只奉公の其忠に後生を吊ひ申すべしとありければ敦盛は名は何時迄も名乗るまじとは思へども後生を吊らはれん其嬉しさに我を誰とか思ふらん我こそは『中か葛原親王九代の後胤』門脇が二男參議經盛が末子未だ無官は假り名にて太夫敦盛とは某なり今年歳は

十六才軍は今日が初なり左のみ物を辱ね玉ふな早や首取れや熊谷とありければ直實も涙を流し扨は中々無官の方にて御歳は十六才になられ玉ふやな某が一子小次郎直家も今年歳は十六才扨は御同年にてましますや御存の通り直家も一の谷の戰にさきがけ至し弓手のかひなに矢を射られ某に向ひ『中此矢抜いて給はれと申せしが』如何に直家弓取が敵と味方の其中で心弱くて如何せん若しも其手が深手なら駒より下りて自害せよ薄手ならば敵と引組んで打死致たせ篠頭の名をけがすなとハット睨みしが其時某方を一目見て敵の

陣所に駈け入るを後姿を見た斗り嗚呼今二目とは見ざりけり心に掛るは親心經盛卿も今日玉の様なる若君を磯邊に一人御殘し嘸ぞや歎かせ玉ふべし哀れ此直實が（替吟つれなき命ながらへて）（替吟武藏に歸りて直家も打たれたと云はば誠に母が歎くべし）（替吟哀れ貴きも賤きも子を思ふ道に迷ふとは嗚呼今身の上に知られたり我子小次郎に思替へ）。又もよく々々御相恰を見奉るに眉はせんけんたり『中兩の髪は秋の蟬の羽にたとへ』。傳へ繪にし空やゑい山の形に相同し是は古業平の片野の野邊のかり衣袖打拂ふ雪の下すいたい紅顔きんし

のよそほひ此若君の御姿繪に寫すとも爭でか筆には盡し難くぞ見へにける直實思ふ樣此君一人打奉るとも千年の齡は保つまじ末代迄の物語りに助けばやと思ひ如何に若君平家方にて仰せらるべき事は武藏の國の熊谷と組で候ひしが我子小次郎に思ひかへ助け參らせ候と御父經盛卿に能々御物語候へと云より早く引立て鎧に付いたる塵打拂ひ駒に打乘せ奉り直實共に駒に打乘て五町斗は見送けるかゝる處に早後に〔くや吐氣の聲をドット揚げ誰ならんと見返せば弓手の方には森田平山扣へたり妻手の脇には虎江殿〕。〔くや續ひて佐々木四

ッ目の紋の旗を押たて上の山には御大將九郎判官源の義經の白旗をなびかせ〕〔くや膝元に取つては先一番に武藏坊辨慶龜井片岡伊勢駿河源氏の一族聲々に〕〔くや武藏の國の熊谷は敵と組んで候ひしが已に組敷ながら助くるは必定逆臣と覺へたり〕〔くや二心あらば熊谷共に打取れと聲掛けられて〕。直實は詮方なくも又も扇を揚げて招ぎよせ如何に若君あれを御覽候へ如何にもして御身一人は助け參らせ度は候へど味方の軍勢雲霞の如く滿々たりよもや逃らせ玉ふまじ哀れ此直實が手に掛け奉り後の代の御追善を營み申すべしとありければ敦盛も涙を流し夫

れ武士は兼て戰場に赴きてはなき身と思へども此處を逃れ落行く先にて若も賤しきものゝ手に掛り面をさらさんは無念なり箇程義理ある武士の手に掛り死する命はおしからん早首取れや熊谷と西に向て手を合せ格護極めておわします さしも剛なる熊谷もいづくに太刀を立つべくとも覺へず暫しが程は十方に暮れておわします去れど又やぐら番所の前なれば斯ては叶ふべからずと猛く心を取り直し「大文も馬上ながら引組んで」。敦盛を兩馬が間に引おろし花の首をみずもたまらず打落す鬼をあざむく熊谷も心も亂れ氣も絶て暫しが程は死骸に取り付き濱に打伏し泣きさけぶ事限りなし去れど又弓矢取る身の哀れにやと漸々心を取り直し頓て死骸を引立見るに鎧の引合せ弓手の脇に卷物一卷差されたり妻手の脇にはかん竹の御笛扇を添へて差されたり彼の卷物を開き見るに敦盛の都落ちの事委敷記し召されたり頓て敦盛の死骸を葬り奉り彼の御笛卷物扇を取り以て駒引寄せ打乘り大音上げて「大平家方無官の太夫敦盛を」。武藏の國の熊谷が打取つたりと勝吐氣ドット揚げ陣所差して引て行く頓て敦盛の首を義經公御實檢なされ後は熊谷に賜はるゝ直實

最は弓矢を捨てもとどり切て武士も捨て妻子に離れ世を逃れ鎧の袖を墨に染め新黒谷に引籠り法念上人の弟子となり其名蓮生法師と様を替へ三歳が程は終夜百萬遍を唱へ敦盛の追善を營みけるこれも敦盛最期の時一言の言葉のかはしある故に「段物武士の情もあるぞかし」。世の中は何と聞ても唱ても浮は世の中つらきは敦盛義理は熊谷物の哀れを留めしは蓮生法師の跡の歎きで「諸事の哀れを止めたり」

註解　小敦盛は初段二段に分ち初段は吉野落初段と同し二段は崩二ヶ所にして他は吉野落二段に同し

○形見櫻（初段）

中村四郎太作

久方の雲井に高く照る月も滿れば欠くる習ひあり況してや人間の世の盛衰も目の當り此理の「段物」例は茲に顯はるゝ」。「大が去れば庄内都の城主」。伊集院源次郎忠眞は島津の重臣として庄内八萬石を領し榮譽きようしにほこり父孝況が欲心の餘りにや反逆を企君の御手を汚がさせ給ふにより悴源次郎忠眞は父の逆意をつぎ頃は慶長巳亥潤三月下旬庄内都の城に立籠る山田安永志和地の城高城財部野野美谷梶山勝岡山

の口梅北恒吉末吉迄都合十二の砦を構へ〔龍の雲を起し虎の風を呼ぶ勢にして〕。〔白石永仙を初めとして祁答院左近伊集院新右衛門の尉比志島式部少輔倉野七兵衛の尉猿渡肥前の守伊集院嘉門之介伊集院兵部少輔忠能忠真が弟伊集院小傳次等を先きとして〕。都合其勢二萬餘騎砦々に馳せ集り籠城の用意をなして島津屋形に弓を引くとの聞あれば君聞召し〔以の外に御腹を立られ〕。〔其儀ならば早く討手を差し向け源次郎忠真が首をはね實檢に備へよとの御掟なれば〕。〔先一番に島津中務少輔忠豊勅納武藏の守忠元、樺山權左衛

門久高〕。〔喜入摂津の守忠政阿多長壽院盛淳山田正巖押川強兵衛〕。〔村尾源左衛門松清等を初とし〕。物に馴れたる屈竟の兵共馳せ集り殘る處なく手配し軍旅の指揮をぞなし給ふ茲に又北郷作左衛門の尉三久は北郷長千代丸を引立數千餘騎を從へ都合其勢十萬餘騎甲の星を炎天に輝し旗差物を嵐にひるがへし同じく六月上旬君の御馬を出させ給ふこそ

「段さも勇々敷ぞ見へにける」。「大か是は扨置茲に又」平田三五郎宗次は平田大郎左衛門增宗の息男とかや今年三五の秋の月雲間を出る風情より尙あでやかに麗敷容色無雙の少年なり吉

田大藏清家と兄弟の好み淺からず共に古郷を出しより片時も側を相去らず征鞍山路を分る日も同じく迷ふ馬蹄のちり軍旅野外に屯せば同じしとねのかり枕共に詠むる夜半の月況んや合戰の場迄一つ道にと志す去れば宗次其日の出立は『何時に勝れて花やかに』先づ肌よりは伽羅の匂の肌寄に卯の花おどしの鎧着て態と甲は召さざりしがみどりの髪を振分け黄金作の太刀をはき平安城永吉が打たる大身の鎗を携へ今ぞ出陣になりぬれば宗次は母上の前にひざまつき今生の暇乞を述べければ母上は只涙に暮れ暫し言葉もなかり

しが鳴命親子の別れ程何にたとへん方もなし親の心は斯迄も勇み立たる宗次は已に駒に打乗り急ぎしに（母上跡より呼返し）。（詠吟）必ず〳〵合戰の場にて未練な事は仕給ふな骸は戰路にさらすとも）。（詠吟）名は末代に殘さるべしと聲も枯野のきり〳〵す泣きわめきてぞ申さるゝ宗次はかねて格護のことなれば）。何の答もなく只ボウ然として居たりしが振り分る黒髪の鎧の袖にはら〳〵と亂れかゝりし有様は宛然陽柳の雨に逢ふて春風に靡く風情なり斯くて清家に追付き共に打列れ急ぎしに此處は早敷根の里にも成りぬれば音に名高き門

倉薬師に參詣せんと諸共に駒より飛び下り忝々敷も南無薬師尊と合掌し此辻堂にしようようして一首の歌をぞ連ねける

書き置くも形見となれや筆の跡我は何國の土となるらん

と清家宗次を抱上筆先高き天上の板の表に記し置き又は此度庄内一亂に依り清家宗次諸共に合戰に趣くと堂の柱に書き付けしは末の代迄も殘されて見る人毎に涙は袖に餘りける共に踏み出す武者わらじ結び合せて行く先きの「譽れは後に知られたり」。

二段

去程に清家宗次打列れはるゝと急ぎしに此處は早庄内「譽」都の城に成ぬれば」。「大柳川原のほとりにて」。春田周左衛門道春に行き逢しがこわ如何に清家宗次殿にてましますや御存の通り某も内村半平と十四才の春の比より兄弟の契約淺からずして春は花秋は月見に詩歌を吟じ武士の勇める道を相勵み樂みけるが斗らすも此一亂到來し矢竹心の梓弓互に敵味方と引き分れ今半平が身の上はいとゞ淋敷思ひし故志和地の城主伊集院嘉門之助に訴へ御内の内村半平と兄弟の

契約致せしにより何卒一日の對面を赦し給らば生涯の本望なりと思の程を深く書き込み矢文を以て乞ひければ城主嘉門之助は『ゆかいと愛着の實情を感んじ』。情ありて此程柳川原に於て頼みある酒宴致せしに何語るべき暇もなく別れの盃さすが又いつか其日も吳羽鳥あやにくも泣て別れの哀なり涙川其源を尋ぬれば誰が誠より出ぬらんかは又は古歌にも逢ふ時は語り盡すと思へども別れに成れば殘る言の葉と今半平が身の上に積る白雪も『ゆかゆる思は此道春が胸の暗』。海人のたく火にあらねども夜はこがれて螢火のもゑて飛立

形もなしと清家が鎧の袖を取て道春がさめ〴〵と泣きければ共に涙を流しける互に此場を別れしがかゝる處に「くん敵の吐氣の聲矢叫びの音おびたゞしく聞へければ清家宗次諸共に馬を乘り出す清家が乘たる馬は逸物なれば思はずも宗次二町斗が程は後れける」。〔くすかゝる處に兎ある木蔭より早尾の若者共五六人宗次を見掛け天晴類なき美少年かな」。〔くすいざ生け取りにして夜のふすまを一つにして只なくさみものにせんと大手をひろげて取て掛れば」。〔くす宗次は大音揚げ汝等如きもの共に此宗次がおめ〳〵と捕らるゝものかなと」。〔くす大身

の鎗を馬の平首に引そばめみどりの黒髪逆に立ち向ふ敵を突き伏せ斬り伏せ車輪の如く切て廻れば」。〔敵兵今は叶はじとや思ひけん逃足出してにげて行く〕。宗次は大音揚げ最前の廣言にも似ぬ臆病至極の者共返せ戻せと駒を飛ばして追掛けゝれど皆臆病神に誘はれて後をも見ずしてにげて行く心の内こそ淺間敷や宗次は赤になりたる大身の鎗を流るゝ水に打そゝぎ「暫し息をぞつきける」。「扨是は扨置茲に又」。吉田大藏清家は家に傳へし重藤の弓の眞中にぎり黒皮をどしの鎧着て三十六差したる大中黒の征矢を負ひ鹿毛なる駒の太

くたくましきに乘たりしが思はずも大勢の中に取り圍まれて斯くては叶ふべからずと頓て〔大音揚げて呼ばはる樣茲に扣へしは島津方に於て吉田大藏清家迚名を得たる強弓の精兵矢次ぎ早の手きゝなり〕。〔汝等共よく見よかゝる矢先きに〕。〔敵は嫌ふまじと五人張に十五束差し取り引つめ射る程に〕。〔生死は知らねど三十六騎は射て落す最早矢種も盡きぬれば持たる弓をカラリとなげ捨て〕。〔固より清家は丸目内藏頭頼忠が門人にて持者流の達人なれば三尺六寸の大刀を拔き持ちて〕。〔大勢が中へ面も振らず割て入り當る

を幸爰を詮度と火花を散らして戰ひしが」。（恰も虎の荒るゝに異ならず敵兵今は叶はじとや思ひけん手詰の勝負は無用なりと）。（鐵砲の者共十四五挺を相勝りツルべ射掛けて放ちければ哀れ清家其身鐵石に非ざれば）。敵の放ちたる鐵砲に胸板を打貫かれ遂に財部の朝の露とぞ消へにける未だ惜しかる歳の廿八惜しまぬ人こそなかりける茲に又清家が郎等佐藤兵衛武任は主人の死骸を肩に掛け味方の陣に退ぞきしが後を見れば宗次は清家を尋ね兼ねたる有様にて只ボウ然として居たりしが武任打見て宗次公かと問ひければ清家殿如

何にとありけるを最早打死にと答へける宗次は以の外に打驚き聞より直ぐに駒より飛び下り（清家が死骸に抱き付き）。（嗚呼淺間しや清家殿死なば一處と思ひしに合戰に暇なふして後れしこそ無念なりと）。（生きたる人に云ふ如く卯の花の鎧の袖に亂れ髪世にある中の云ひ替し桃李は物を云はねども）。今は最後の色見へて跡に殘りし紅葉葉の散るも惜しまぬ太刀のつか是迄なりと思ひ切り武任（さらばと云ひ捨て）。（駒引寄せ打乘りて大音揚げて名乘る樣）。（此處に進みしは島津方に於て平田三五郎宗次と申すものなりと大

勢が中へ面も振らず割て入り」。「爰を詮度と世に烈敷火花を散らして戰ひしが向ふ敵七八騎は打取り」。「其身も數ケ所のきずを蒙り哀れ三五の秋の空」。かわりゆく代の習ひにて義の爲めに百年の命を縮めかばねを戰路にさらし一陣の風に誘はれて遂に財部の朝の露と消へにける今を盛りの花衣きて見る人々は「涙は袖にあまりける」。

三段

爰に又新納武藏の守忠元は文武二道に達し和歌の道にも「長じたりし身なりしが。「此度の合戰に粉骨を盡し」。八旬

に垂んとして山田の城を攻落し非類なき働きありしも兼てより我軍卒の武勇を賞美し仁愛深く恩賞を與へなづけ給ふにより向ふ處敵なく皆我が手足を使ふが如くにて假りにも敵に押付けを見せたる例しなければ近國他國に隱なく武勇の程ぞ聞へける玆に又富山次十郎迚生年二八斗と打見へて「大か容色無双の少年なりしが」。花やかなる鎧を着し一陣に進みしは天晴勇々敷ぞ見へたりしが敵の放てる鐵砲に胸板を打貫かれはかなき最後は財部の草葉の露とぞ消へにける之を聞くより忠元は早くも尋ね訪はれしがらんじやのにほひ

消へやらで蓬がもとに打伏して玉の様なる顔もたちまち消へて雪しもの氷の肌とひゑわたる姿と化してあぢきなや

（朝に紅顔あつて生路にほこり）。（夕には白骨となつて荒原に朽つ去れば詩の心にも同じ思のすがむしろ）。（露をかたしき草枕寝亂髪は打解けた姿となりてあだし野の草葉にすだく虫の音と）。泣く〻〻死骸を埋め餘り心の痛しさに一首の歌を連ねける

昨日迄は誰が手枕に亂れけん蓬が本に掛る黒髪と追善にそなへ給ひて手向の水を打そゝぎ暫し回向をなしにける去れ

ば形見の櫻誰が此の里に植へ置きて名も財部に匂ふらん見る人聞く人毎に「涙は袖にあまりける」。斯る折しも〔くつ〕所々の陣山田安永志和地の城〔くつ〕合戰烈敷太刀打のしのぎを削るつば音の轟く駒の足並も揃ひ兼ねたる敵味方命は塵芥よりも輕く義は金鐵よりも重くして死骸の上を乘越へ〻〻攻戰ふ有様は何時果つべき戰とも知らざりけり〕。〔くつ〕又は白石永仙が奸計におちいり味方の勢を數多そんじけれど同じく十月上旬森田に御陣をうつさせたまひ〕。〔くつ〕晝夜を別たず攻め給ふ先一番に島津中務少輔忠豊喜入攝津の守忠政〕。〔くつ〕樺

山權左衛門の尉久高山田正巖押川强兵衛村尾源左衛門松清等を初として。〔くつ物に馴れたる屈竟の兵共當るを幸ひ爰を詮度と切て廻れば打たるゝもの數知れず〕。〔くつ又は兵糧の道を斷ち給へば飢に及ぶ者數知れず〕。去れば内府公庄内一亂の趣き聞し召し和久甚兵衛直友山口勘兵衛の兩人を差下され和睦降參すべきとの御掟なれば此時忠眞は都の城は兎に角にかためけれど十二の砦も過半落城に及び日々兵氣もおとろへ只術計に盡き果たる折柄なればこは難有御掟なりと直ぐに君の御前に罷出降參の趣き後悔の色を顯はしければ

君聞し召し「汝が日比の逆罪深と雖ど」。内府公の命に依り又は當家の門葉先祖の勳功難捨殺人刀活人劔の心を以て死罪をなだめ本の如く臣下となし給ふ去ば忠眞は難有君命を蒙り夫より隅洲野尻の邊にやつれはてゝ居たりしが茲にむかさの士押川治右衛門淵脇平馬と打列野尻の原に雉狩に出けるが押川一の雉を見掛ねらひつめて打けるに雉は早も飛去其矢あやまつて忠眞が眞向を打ち貫き其儘馬より落て死したりける之も忠眞が罪科天道未だ赦さゝるにや終の程こそおそろしや去れば白石永仙は忠眞に反逆を進めし科に依

り隅洲姶良の郡脇元に於て獄門にかけられ其外一族殘らず亡ぼし給ふ去ば忠眞は普代恩顧の重臣として御聟迄も成りし身なりしが如何なる天魔の入ぬらん「段落終の程こそ知られたり」。夫より薩隅日三洲靜ひつに治る「段落御代の程こそ目出度けれ」。

註　形見櫻は初段二段三段に分ち初段は吉野落初段同樣ふれ共崩一ヶ所井に吟替及和歌あり二段は崩三ヶ所井に吟替及和歌あり終りは吉野落初段に同し三段は吉野落二段同樣ふり

○日本海大海戰紀念

其の一段　本戰決勝の卷

韓盧猛しと雖ども、塊を追ひ、獅子一たび起てば人を咬むとかや、茲に敵國バルチック艦隊は、一と歳餘り海陸に、耻辱を重ねし連敗を、我れ一戰に復せんと「大か極東遙かに押寄せつ」。（吟）一ちの提督ロヂエストウエスキー）。二の提督ネボカトフが引具す艦船三十八隻、日本隨一の要害を、揉み碎いてや通らむと、玄海洋を東して、威風頓に潮を捲き、鷲の羽風の鋭くも、東水道を

ぞ乘り切りける、

味方は東郷大將を首めとし、數萬の烈士悉く、豫て期したる事ながら、容易ならざる敵が勢力、彼れ碎けむか將た我歟、天地を睹するこの機會、若しや武運の拙なくば、我が　皇國を奈何にせむ、一死君に酬ゆるは常なれど、死しても任務は尚盡きじ、此の上は只だ至誠の念力、祖宗の威靈に縋らばや、處は何處ぞ我同志よ、弘安の昔畏くも、八萬八船を沈めたる、神の御威稜の名殘の海、波打際の彼方には、正八幡も照覽すぞ、いでや一天一日の下、曠れの武運を試さむと、言合さねど三軍は擧つて拳を握

りけり、頃は明治乙巳の歳五月廿七日『中』早眞午にも成りぬれば』。敵艦隊は肅々と、沖の島をば跡にして、日本海にと差掛る時こそ來つれ好敵よと、我れの聯合各艦隊、敵の出鼻を扼しつつ、煙霧の中に結束し、息を殺して控へけり、濠氣深くして展望は、五海里だにも及ばねど、物見細作情報の機關はさながら蛛蜘の巣の、隅より隅に行き亘り、四十海里の其が程は、手に取る如く知れて來つ、打てば響かむ作戰に、敵はムザ〳〵陷りしと、知るや知らずや悠然と、旗艦スワロフを尖頭に二列に組みし陣形にて、我れに近づく時しもあれ、スワヤと閃めく戰鬪旗、三

笠檣上に颯と吹き各艦齊しく揭ぐれば、將士奮躍火の如く、不敵の仇が眞つ先きに〔くつ火蓋を切りし一彈を、視詰める間さへ荒濤の〕。〔くつ山なす中を前後ろ、一度にドッと打ち放つ〕。〔くつ味方の配置コハ如何に、敵の針路を横なぐり〕。〔くつイの字形に遮ぎりしは、世界の東郷天下の上村兩提督の主力隊〕。〔くつ幾段優勢と許れし、敵戰鬪艦を擊壓し、後詰めの切所は巡洋艦、第三戰隊、片岡が早くも廻りて屹つと立ち、少將小東郷の戰隊と、敵の後尾を挾み擊つ、續いて瓜生出羽の二戰隊敵の背後を擊進み、右には敵と駢行し、中を斷ちては左に出て、縱横無盡に旋り擊

つ、包圍の戰略水も洩さず、砲手が腕の冴へたれば、逆捲く怒濤の其の中に、天つ晴れ命中頻りにて、流石精鋭の敵勢も、息つく暇の有らばこそ、激戰軈て五十分〕。午後三時にも及ぶ頃地軸に徹する砲聲を、排て一際閧の聲、味力に起る前面には、左列先頭オスラビヤを眞つ先に、續いて右列スワロフも、二番艦アレキサンドル三世も、爆彈浴びて火を失し、炎焰天に漲りつ、已むなく戰列をはなるれば、爾餘の諸艦も順々に燒けつ打れつ亂れ立ち、敢なくオスラビヤの沈沒に陣形茲に崩壞す、こゝぞ大事の絶頂よ、一分一秒の機先こそ、皇國の興廢に關すなれ、千番

一番の決戰に「後れな取りぞと驅逐艦、廣瀨鈴木の兩隊が、鬼神の如く突進し」。「敵司令長官の坐乘艦、スワロフ目蒐けし水雷の、發矢と左舷を打ち惱やめ」。「傾斜危く仕做したり」。「目醒むる業は這處、彼處、出羽瓜生が仕留めたる、特務艦船一二隻」。「片岡小東郷が手に擊ちし、工作船カムチャツカ抔、就れもキールを露わして逆天非の最後にぞいよ〳〵敵も怯みけむ」。北に南に將た西に、幾回となく轉針し、血路を開かむ進退は、死物狂ひと見へたるが、我が各戰隊の駈け引きは、かげらう稲妻水の月、去りつ開きつ又合ひつ、殺活擒縱意の儘にて、避け

得む道の有らなくに、ボロヂノ、アレキサンドル、ウラルも俱に、前後隔てゝ相斃れ、夕日映へ有る其頃は、片岡麾下の藤本驅逐、敵艦隊の首腦たる、スワロフ號に最後の一擊、全く十十目を刺しければ、又も勝鬨鳴り渡り「天にも昇る威勢なり」。

其の二段　水雷奮擊の卷

斬り結ぶ刃の下は地獄なり、踏み込んでこそ極樂もあれ、五月二十七日、日露決勝の海戰は、流石强露の君臣が、最後の望をかけたりし、大艦隊の將士として、勇猛果烈の働きは「尋常ならず見へたるが」。「味方は一兵一卒も」。海底飜す爆彈に、瞬毛の

水だも動かさず、精魂宇宙に滿ちければ、一心に立つ刄無く、敵は次第に怯みつゝ、無殘や僚艦一又一、見る〳〵影を沒し果て、右往左往の亂戰に、蒼茫の色白み行き、黃昏時にも成りぬれば、我が艦隊は機を計り、北東指してぞ切り揚ぐる、イデや時なり我が時よ祈りし甲斐に朝よりの、强風さへも凪ぎにけり、浪高しとて海は海、日頃年頃鍛へてし、我が荒膽の試し場所得たりや應と日の本の武道の、粹と仰がるゝ、驅逐隊水雷艇隊決死の面々、滿を持したる剛弓の〔弦を離れし矢の如く、先を爭ひ艦艇を、驀地にぞ行りにける〕。〔北より突くは藤本か、北東の方

よりは、矢島川瀨と見受けたる〕。〔驅逐三隊猛烈に、先きへはやらじと壓しつゝ、吉島廣瀨の兩隊は、東南の二方より、跡追かせじと逐ひまくる〕。〔中を縫ひ行く艇隊は、巨鯨に仕蒐かる鯱の群、アナヤ先登一擊は、矢島が隊歟朽惜しと〕。〔後や先き先や後なる、奮擊の出沒自在にて、電光石火の其が主は、福田、大瀧近藤や、青山、川田と名も高き、頑勇無雙の各隊に屬する水雷數十艇〕。〔就れ劣らぬ滅法の勇士が眼には高波も、千尋の底も一樣に、錦の衾と見へつらむ〕。曳やシューツと遣放つ、魚形水雷の數々は黑鐵の山に均しき戰艦の急處々々を狙ふにぞ、敵

もさる者絶間なく、砲をもあざむく探照の爛たる光に氣を制し、單縱砲火の疊み擊寄る艇毎に浴せしが、鍔元くゝる勇者には、干將莫耶も詮あらじ、肉薄餘りに近かければ砲門の角度先きに越し擊ちも正準ひも得ざりけり、爾れば前後に入亂れ、火華を散らす血戰に、巨岩をあざむく敵艦を互に救ふ由も無く死途路亡途路の末なれば、三更過る比ひには、サジモ堅固と聞へたる、戰鬪艦シソイペリーキ、其の外に裝甲巡洋艦、ナヒモフ、モノマフ二艦迄、泥に醉ふたる池鮒の腹を斜めに浮くが如、息絶々と成り果てぬ、斯かる千古の功勳に、別けて武名を留めし

は福田艇隊の第六十九號艇、青山隊の第三十四號艇、川田が隊の第三十五號艇、合せて三隻の最期こそ、驚に向ひし鷹共の、身を粉に碎かむ時までも、敵を嚙抓く如くにて、沈みながらも發射を止めず、或は彼れに衝き觸れて我れと破りし壯烈は實にも目ざむる許なり、この混戰とかけはなれ、四方八面索敵の、任務を果てし者の中、鈴木が隊の幸好くも、韓崎沖に見事なる、戰艦ナワリンを仕留めしが、當夜掉尾の手柄にて光景しばし、靜まれば、早東雲の明の風「威武を四海に吹かせける」。

其の三段　敵艦捕獲の卷

千巖破る神世この方、日の本の、日こそ皇國の、柱なりけり

雄圖東海を呑みつる「露將が苦心泡と消へ」。「大翌れば廿八日の朝まだき」。殘る主力は唯五隻、ネボカトフ少將の采配にて、竹島沖にぞ遁れ行く、此方は參謀の計りけるは、驅逐水雷の各隊が夜を徹しての猛擊に西南より追ひ詰めて一分のすきも吳れざれば、必定敵は此の道よと、松島あたりを本據とし、待ち構へたる日本勢、西に東に搜索の、眼をくばる其中に片岡艦隊逸早く敵云々と警報し、我逃さじと追進めば、瓜生小東郷の戰隊も、同じく之れに加わりて、後尾を確と包みける、水や空な

る彼方にて海鳥低く飛ぶ處、煤煙幾條靉くは、紛ふ方なき敵艦也と、我が大將は指しつ參謀諸官と計る樣、徐ろに包みて急に擊たば、手取りにせんも難からじ、弓矢八幡の加護なれや、昨日と異なり今日はしも濛氣一空痕無くて瑠璃金色の日本晴、之れ屈强の天の時、逸るな急くなと下知の下、沈々として舵を更へ、敵の正面を杜塞ぐ、諸艦は麾下の戰艦や、裝甲巡洋の上村隊、魏々然として控へしは、八萬由旬の須彌山が、不意に湧き出し如くなり、況して巧みに追尾せし、四個艦隊の早既に、森々とこそ詰寄せて、稻麻竹葦と取籠めつ、主力艦隊と見合ひつゝ、幾百

門の筒先を一齊グルリと差向くる、之れと見て取る敵艦は、唯一隻が目を脱けて、浦鹽指して奔りしも、戰鬪海防各二艦、重圍の裏に陷りて、強いて逃げなば唯一擊、木ッ葉微塵は眼前たり已ぬる哉ネボカトフ、如何に稀代の勇なり迚、翔ける飛鳥の翼なくば、智にも力にも爭かで及ばむ、誠や古の漢詩に、

時來天地皆合力　運去英雄不自由

と丈夫無限の感慨は、あわれ此場の謂ならむ、爾れば敵將ネボカトフ、絶對絶命の切なさに、部下諸共是非無くも、神に祈禱を献げつゝ、祖國の方を伏し拜み、俄破と一決議を定め、一片の記

號悄然と、マストの央ばに垂させて、肅然無言に無念を呑み、頓みに降參をぞ表しける、四艦は何ぞ、第一は、スラヴの徽章と知られたる、鷲を意味するアリョール、アブラキシンやセニャーウキン、何れも露國前代の、誇りと立つる勇將の、紀念の名とは聞へたり、次に、ニコライ一世は抑什麽三國干渉の其折に、大平洋艦隊旗艦として、遼東還附の屈辱を、我れに與へし筆頭の、仇も歷史も國民が、終天忘れぬ醜艦の、廻り〳〵て我手に歸し、我が日の本の日の丸の、國旗を建てし瞬間は、各艦各艇の將士卒、十年磐石を脊に負ひし、重荷除けつる心地しつ、忝じけなきに

胸迫り、泣く剛者も多かりき、捕獲艦上幾旒の、帝國々旗を靡かせて今ぞ祖宗も知し召せ、我が歡聲は海超へて、伊勢の宮へも届けよと、三軍一度に揚ぐるなる、叫は萬歳萬々歳、内より起る嘹喨の調べ凉しき音樂は、

君が代は、千代に八千代に、さゞれ石の
巖となりて、苔の蒸すまで」。

其の四段　敵帥生擒の卷

敵が最後の力爭も、殘艦主力の降伏に、早終りをば告げしかど、打ち洩らしたる敵の艦十十目刺せてふ、命令を領掌してか驅

逐艦名は雅びても乘る人の、「心は猛き漣や」。「大興にはなれぬ陽炎の」。將士は腕を扼しつゝ、流星大空を奔る如、波間を南北縱横に、彼方此方と索めしが、其れと見ゆる艦は無し、アナ甲斐なしや仇艦の、仇波深くて咸沈み、最早殘艦あらざるかと、汐の八百路の八潮路を、右に左に駛せ廻る、午下三點を過くる頃、見出したりな敵の影、處は欝陵島の南西にて、島を巨る事四十海里、東の方より辿り來る、二隻は敵の驅逐艦、御座んなれぞと陽炎漣、一直線に追及して、砲門パット忽ちに、紫電閃めく焔煙の、立罩眺むれば、一艦倉皇雲霞、逃去る跡を陽炎の追ふに仕せ

て漣は、殘る好敵イザと、許り、第二の彈丸咄嗟の危機、コハ抑如何に敵艦は潮蒸す風に翩翻と、白旗高くぞ擧げたりける、扨てこそ彼れは降伏か、脆きは手並の友ならじ、苦々しさよと立寄りて、形の如くに臨檢すれば、再び驚く事ぞあれ、艦上の乘員、過ぎて多かる其が中に、威嚴衆に勝れたる、一老將の臥す邊り、幾多の將校跪まづき、恭敬おさ〳〵怠らず神に事ふるも斯くや、と計り見ゆるにぞ、何人にやと打問へば、敵の士卒は慇懃に、あはれ此の一室を恕されよ、此は吾軍の總大將、ロジエスト提督閣下にて候昨日よりの惡戰に、提督の召させしスワロフは、帆

桁も留めず沈み果て、搗て、加へて提督は見らるゝ通りの重傷に、已むなく之れなる驅逐艦、ビエドウイに移し參らせつ、神掛け勞はり奉れども、玉の緒の今や絶なむかと、身も世もあられず覺へ候、願ふは作法に情けを加へ、移乘收容を止めさせ給へと、拜まん計りに慕僚の、賴む心ぞいぢらしき、思ひ設けぬ事なれば、我が將校下士卒は、互に目と目を視合せつ、瞼を傳ふ落涙の、留め兼てぞ見へけるは、武士は相見互見と、祖先この方腦天に、打込れたる眞丈夫の、何時とはなしに我れ知らず、感激の情せき揚げて思響一如の一刹那、功も武名も無かりけり、斯くて

は果てじと漣は、ロジスト殿をば、介抱の人も藥も其儘に、爾餘の雜員を收容し、ビエードウイをば曳綱の、一ノ一への波枕、敵將の夢如何ならむ、日韓灘の濤の音「千秋萬歳彊り無く」。國の武名を長へに、語らむ迚や響くらむ「語らむ迚や響くらむ」。

註解　當日本海々戰は四段に分ち初段は崩二ヶ所にして吉野落初段に同じ二段は崩一ヶ所三段四段は崩なし只三段に詩吟あり四段は最終の段なれば吉野落二段同樣の切りにて終るべし

新案

薩摩びは歌

終

明治三十九年五月十八日印刷
明治三十九年六月十一日發行

上製定價金參拾五錢
並製定價金貳拾五錢

作曲者　那須祐直
發行者　小川寅松　東京市京橋區南紺屋町十八番地
印刷者　川崎佐吉　東京市京橋區築地貳丁目卅番地
發行所　尙榮堂　東京市京橋區南紺屋町十八番地

不許複製

253
157

074660-000-6

特63-668

新案薩摩びは歌

那須　祐直／作曲

M39

CEJ-0173